

にして、悉く、銅鏡、金銅、瑠璃等を嵌入し、螺鈿、七寶をちりばめたり。欄間には、二十五菩薩の像を掛けて、雲中供養の體を示したり。四壁、及び三方の二に、淨土九品の説相を畫きたるは、繪所の長者たりし爲成にて、その上部の色紙形に、觀音經の文句を書したるは、中納言俊房卿なりといひ傳ふ。あはれ、古は、いかばかりめてたかりけむを、今は、剝落して、たゞ、それとたどらるゝのみ。堂の前面は、阿字の池ありて、いとものさびたり。釣殿は、この池の側にありて、その中なる佛も、めづらしきものありと聞けど、入りては見ず。宇治文庫といふは、こゝにありしものにやなど、ちもふもゆかし。入口に、頼政の扇の芝の跡ありて、碑たてたり。堤に上りて見れば、滔々と流るゝは、宇治川にして、むかひにたゞなはれるは、宇治山なり。幽邃にして、壯快なる、全國第一といふべし。宇治橋は、こゝよりは左なり。その下流に、遙に見ゆるは、橋の小島が崎なりとぞ。生暖、磨墨のいなゝき、今なほ、聞ゆるが如く、「宇治のあじろにかゝりけるかな」とよみたる昔も、忍び出でたる。橋をわたりて行けば、常光寺といふあり。放生院、また、橋寺ともいふ。かの大化二年に、釋道登が、建てたりといへる宇治橋の碑は、この寺にあり

と、かねて聞き居れば、行きて見る。竹のあらがき、結ひめぐらして、丁寧に保存せり。舊の碑は、久しく、土中に埋れしを、寛政年中に、この寺の庭中より、堀り出したるが、そも、全きものにはあらで、僅に、二十五字を存せしのみなるを、小林亮適といふ人の、補刻して、かくはなせるなりとぞ。碑の全文は、帝王編年記に載せて、今は、世に知らぬ人も少きを、かの續紀に、この橋を建立せるは、道昭なりとかける誤も、この碑に據りて、明に知らるゝは、貴からずや。こは、はやく、狩谷掖齋も論ぜりとちほゆ。川ぞひに、なほ、ゆけば、離宮八幡宮あり。下の社は、菟道稚郎子尊を祀れりといふ。あはれ、この地よ、鹿の聲、螢のかげ、千鳥、氷魚などによりて、むかしより、名高きのみならず、かく、歴史のあとをさへ、さだかにとめて、行人をして、たやすく、過ぎがたからしむるは、いかなる尊き所ならむ。この山の神、この川の神の、高き御徳さへに、忍ばれてなむ。さて、この夜は、川へりなる、萬碧樓に宿る。夢は、鳳凰となりて、九品淨土に遊べるもうれし。

うきよをば遠くはなれてこの夕

嵯峨野のむしのこゑをさかばや
それ、よからむとて、出てたつ。

小車につなつけさせてなく蟲の

嵯峨野にゆかむ日の暮れぬまに
二人乗に、二人乗る。

松蟲は待ちてをあらむこほろぎは

こひつゝあらむくるまはやひけ
金、すこし、まらむといへば、飛ぶがごとく走る。

松蟲もあはれならぬにあらぬども

ふりすてがたしすゝむしのこゑ
こは、これ、車中の議論。

蟲の音のまげき所にかゝりけり

こゝは嵯峨野かそれかあらぬか

問へば、このわたりも、嵯峨野なりといふ。

松蟲の聲よりほかにこゑもなし

琴さゝばしはあきかぜのうち

この橋は、彈正大弼仲國の、駒をとめて、琴をさしたるところ。

いにしへの琴のまらべは知らぬども

いまもさこゆる松かぜのこゑ

橋をわたりて、二町餘、小督局の墓あり。この歌は、それに手向けたるもの。

郭公ほどをすごさずたづね來し

こゝろを知るややどのあるじは

宿は、例の郭公亭。

蟲さゝにまたちはせしか松蟲の

まつかひありてまたちはせしか

こは、亭の主人の言を直譯せしもの。そもそも、嵐山の花、大井川の紅葉、見に行き
たりといふ人はあれど、嵯峨野の蟲、さゝに來たりといふ人はなし。嵯峨野は、蟲

の名所なり。さる名所なるを、人の訪はざるは、蟲の鳴かずなりにたるにやといふに、さにあらず。蟲は、いにしへにくらぶれば、おほしとも、すくなきことなしとかや。さては、世は、俗にのみながれて、まづかなることを、好まざるによるならむ。なにとなれば、花見むには、酒なかるべからず、紅葉見むには、三味線なかるべからずとは、今の世の人の、常に、いふところなり。これに反して、蟲に、酒、三味線は、いかゞあらむ。これ、嵐山の花、大井川の紅葉のみ、めてられて、嵯峨野の蟲の、めてられざるゆゑよしならむ。われら、常に、蟲をさくを樂しむものなり。一昨年も、昨年も、この嵯峨野に來り、この郭公亭に宿れり。主人の歌、あらず、そのことばは、そをよるこへるものならむ。湯に入り、湯かたびら身につけ、欄干ちかく立ち出でて、さて、嵐山にうち向ひたるこゝち、えもいはず。飯たうべなどして、さて、亭を出づ。大井川の岸づたひ、三四町ものぼりしに、松蟲、鈴蟲、蟬、蟋蟀、促織など、蟲といふ蟲の聲々、まきりなり。二人、石に腰うちかけて、まばし、餘念もなく、さゝ居たりしが、まらずまらず、例の時事談にうつりぬ。

あや錦身にまとふ人にさかせばや

つゞれさせてふむしの鳴く音を

こは、萩の家の慷慨。

治れる世になれなれてくつわ蟲

なく音をよそにひとのきくらむ

こは、巴戟天舎の悲憤。今夜は、蟲きくにきたるにあらずや。さる慷慨談は、さる悲憤談は、共に、やめむとて、なほ、おくの方へたどり行きぬ。蟲の聲、いよいよまげし。

秋の夜のあくるも知らでなく蟲は

わがごとものやかなしかるらむ

さりぎりすいたくな鳴きを秋の夜の

ながきおもひはわれをまされる

わが如く物やかなしきさりぎりす

くさのやどりにこゑたえずなく

秋の夜のあはれは誰も知るものを

われのみとなくさりぎりすかな
音に立て、鳴かぬばかりぞさりぎりす

秋のうらみはわれやおとれる

秋風に尾花ちる野のさりぎりす

いたくな鳴きその思ふころに
秋の夜はねられざりけりあはれとも

うしともむしのこゑをきいづ

わればかりうき夕かとおもひしに

くれてぞ蟲もなきはじめける

以上の古歌は、今夜、われらの脳裏に往來して、やまざりしものなり。さはいへ

古人のかなしといひ、うしといひ、又、うらみといひ、おもひといひ、あはれとい

ひしは、かの諸行無常を感ぜしもの。かの故郷を去のびしもの。老をなげきしもの。

ちぎりし人の來ぬを、うらみしもの。わが身を、かこちしもの。われらは、さる女

らしき竹を起すものにあらず。われらの、かなしといひ、うしといひ、又うらみと

いひ、おもひといひ、あはれといひは、他にあるなり。敢て、こゝには、明言せざ
れど、知る人は、必ずや、知らむ。草葉の露まげさがため、袂も、いみじう、ぬれ
そぼちたるに、吹き來る風も、そとろ、寒うおぼえしかば、路を、野の宮の方へと
りて、宿にかへりぬ。樓にのぼりしに、われらの部屋、一つへだて、數多の客あ
り。いと、らうがはしと思ひてありしに、はては、三味線などひきならして、舞ひ
さわぐめり。あはれ、そのむかしは、琴の音の、まのばれし嵯峨野、今は、三味線の
音のすさぶにまかせぬ。かの松虫、かの鈴虫、虫にして、もし、心あらむには、今
昔の感、そもそも、いかならむ。おもへば、こゝも、また、うき世のどが野か。

十八 舊内裏

舊内裏の拜觀は、かねて、聽さるゝよし承り居れば、一日、沐浴して、出て行く。
主殿寮出張所の紹介を経て、御臺所門より入る。殿掌、殿部をして、懇に、案内せ
しむ。塀重門を通り、平唐門をくぐり、公卿間より昇りて、清凉殿に至る。渡廊を

わたれば、鬼おになり。鬼間といふは、この南壁に、白澤王、鬼を切る繪えのあるによれり。次は、臺盤所なり。こゝは、御膳具を調ふるところなり。次は、朝餉間なり。こゝは、朝夕の御膳を供する所なり。次は、御手水間なり。これより、右にそひて廻れば、藤壺上御局、萩の戸、弘徽殿上御局なり。それより、東にめぐりて出づれば、正面なり。この隅に、荒海障子、昆明池障子は立てり。二間ふたまといふは、こゝにありて、僧の語りしところとぞ。その奥は、夜御殿にて、四方に妻戸あり。御帳臺は、正面にありて、仰ぎ見るもかしてし。石灰壇といふは、神宮御遙拜のところにて、東南の隅にあり。石灰にて、壇を築き、その上に砂をまきたるなり。それより、南は、殿上にて、落板敷を通りて行けば、小板敷、神仙門も見ゆ。こゝには、年中行事の障子、日給札など、今も、立てられたり。大床子もありき。かの五節の肩拔などは、こゝにてあるべし。こゝを見たまはむとて、作れる櫛形の窓は、南の隅にて、鬼間のあはひの柱を挟みて、あけられたり。その形、げに、櫛の如し。空柱うつらばしらといふは、殿上の東にありて、御殿御殿の行合より落る雨水を、ひとところにあつめて、その中に引かむためのものにて、中心は、うつろなりとぞ。この御殿は、中古以來の宸居

にて、總じて、七間四面なり。東面にして、階は、二箇所にわかれたり。吳竹臺、河竹臺は、こゝに立ち、御溝水は、この前を流れたり。古書に、この竹臺に生ぜし筈をとりて、御膳に供せしと、また、御溝水に、盃をうかべて、公卿など、詩をつくりしことあるをちもへば、古は、その溝も、いと大いなりしにや。清凉といふ名も、この水より起れりと、承れば、決して、今のごときものには、あらざりしなるべし。小板敷を東にわたり、南廊を傳ひて行けば、紫宸殿なり。九級の小階を昇り、簀子を通り、南に出づれば、即ち、正殿なり。寶聖障子といふ、馬周房玄齡以下、卅二人の肖像は、そのまゝなり。但し、金岡の筆意、のこれりや、否やは、知らず。御帳臺は、中央にありて、御椅子立てたり。獅子、狛犬は、左右に侍せり。この御殿は、中古以來、即位、朝賀の禮を、行はせたまふところにして、總じて、九間なり。南面にして、十八級の階あり。この西に見ゆるは、右近橋にして、東に見ゆるは、左近櫻なり。正面の御門は、承明門にして、左は日華、右は月華なり。宣陽殿は、左近陣の東にありて、内侍所は、その向なり。貴さとなつかしさにて、暑さも、涼ばしは、忘れぬ。これより、小御所、御學問所のあらましを拜觀す。常御殿のわ

たりは、見ることを得しめざる御定なれば、そのまゝにて退く。さて、もとの道に出でて、御臺所門よりかへる。今まばしと、おもへども、あまり、食るがやうにもとて、あらあらにして、かへりぬ。読みさしたる書をばのこして、出でたらむやうにて、更に、名残盡させず。

あはれ、人の心は、さまざまなれど、この内裏を拜観せしものは、皆、おなじおもひならむ。孔明が、出師表を讀みて、泣かざるものは、人にあらずと聞くを、この内裏を拜観して、泣かざるものは、わが國民にあらざるべし。そもそも、延暦弘仁の盛時は、いふまでもなく、源平の合戦に、内裏焼亡せしを、少納言信西が、再建してより、大かたは、昔のさまにかへりたりしに、程なく、世は、亂れに亂れて、また、皇居は、城外に遷されたまひぬ。これを、里内裏と申しき。それも、まばさば、兵燹にかゝりて、足利氏の末には、あるかなさかに、衰へさせたまひき。その頃の書に、御屏は、崩れて、人、皆、往來し、御階の橋の下には、物賣る翁居り、階上には、小兒の、土を練りて、團子人形を造れるさまに記せるを、おもふべし。ある公卿の、装束のかはりに、蚊帳を身にまとい、御殿の燈の外より、見すかざる、

など、いひつることあるも、この頃の事なりけむ。わが國の何たるを知るもの、國史の一斑を知る者、これを見、これを聞かば、誰か、泣かざる者あらむ。されど、名分の學、遂に、おこらず、大義を辨へたる人も、少なかりしにや。このまゝにして、數代を経させたまへり。

徳川氏治世の後、名分の學、やうやう起り、京都のおとろへたるを見て、泣くものあり。皇城の小なるを見て、泣くものあり。遂に、寛政の初に至りて、松平樂翁侯、幕府の老中となるに及びて、儒臣柴野栗山に命じて、古宮殿の事ども、調べさせて、建築せるが、この舊内裏のはじめにして、今の御造作は、安政年間のまゝなりと承る。これは、中古の十分の一にも達せず、たゞ、紫宸殿、清涼殿のさまの異ならざりしのみにて、その規模の狭小なるは、雛形ともいふべくや。そもそも、御殿の廣狹によりて、帝室の尊嚴を、損益しまつるべくはあらねど、蕭何がいはゆる、皇城の莊嚴なるを見ずば、いかで、天子の尊さを知らむといへるも、また、そのことわりなくてやは。かつは、足利幕府、徳川幕府のさまと比べ見よ。室町の花御殿、金閣寺、銀閣寺、江戸城の結構、日光、上野のさかえ、これと思ひ、これを見て、この内裏

をちもひまつらば、誰か泣かざるものあらむ。宿にかへれば、あるじ、過ぎし夜の、大文字山の事ども語る。何が爲に起りしものかと聞けば、天子様の御苑内の池にうつして、慰め奉らむためよりと、承るといふ。げに、賀茂の行幸も、御心にまかせたまはざりし、御代の事をちもひまつれば、さることならむとて、

そのかみを偲びまつれば鴨川や

むすばぬ袖もつゆけかりけり
と、ちのちのうたひて止みぬ。

十九 かへり路

今日はいづこ、明日はいづこと、旅の空に、あまたの日數をかさねぬ。猶、見まくほりするところ、おほかりしかど、さのみはとて、かへりぢにむかふ。出てたちし宿は、鴨川のほとりなる旅館。出てたちし日は、九月の下の七日。出てたちし時は、午後の四時。夜汽車のことにしあれば、この後、ちもしる事

の、あるべしとも思はれず。ここに、ささやき、心に感ぜし事どもをまゐりして、明日は何處、あらず、いよいよ、東京に入ることとなさむ。關が原あたり、汽車の進行中、鉛筆とりて、

こたびの旅行中、

うれしかりしもの

出立の際、親しき友より、扇に、すゞしげなる歌かきておこせたる。京都に、大坂に、奈良に、滞在中、ちなじ心の友などの、たづねきたる。ことに、須磨にて、霧離舎主人に、京都にて、榎舎主人にあひたるなどは、うれしといふも、物の數かは。月あかき夜、下賀茂の御社に參詣せしに、かなたに、聲はりあげて、もの歌ふ聲す。なに事ならむと、耳そばだて、さくに、「君を祈る心の色を人間はとたすの森の赤の玉垣」といふ古歌を、うたふなりけり。詩などこそあらめ、書生などのかゝるところにて、かゝる歌うたふなど、國文學興起のまるしかと思へば、こも、うれしきもの、一か。また、ある古書をもとむとて、京都の書林といふ書林をたづねしに、いづこにもなし。大阪には、必ず、あらむとのことなりしかば、行きてたづねしに、

こゝにもなし。なほ、ある書林にたのみて、さて、ひなしく、京都にかへり來りしは、二日経て、その書、もとめ得たる旨、いひおこす。郵便などにてとも思ひしかど、一日もはやう、見まほしかりしかば、また、大阪に行きぬ。その價十五錢をばらひて、その書を、手にいれたるうれしさ、なに、かたとへむ。書の價は、僅に、十五錢なり。されど、二度まで、大阪に行きたる費用を加へむには、六圓もかゝりたらむ。さる高價にもかゝはらず、この書得て、うれしう思ふは、いにしへを慕ふ、われわれの心のみ。世の人は、馬鹿らしともいはむよ。

をかしかりしもの

新橋停車場にて、萩の家が、風呂敷に包みおける梨子を、掏兒にすられたる、いみじうをかし。アキノミとは、誰かいひけむ、ナシにてありけるものをなど、たはぶれいひたる、いよいよをかし。汽車に乗りしに、われわれの外に、二人連の紳士と、一人の紳士と乗りこみ居たり。その一人、たしかに、見おぼえある顔なれど、たれともわかず、なほ、よく考ふるに、落語家にて、名高き柳家某なりけり。われわれは、互に、それとさゝやきてありしに、二人連の紳士は、落語家なるを知らず。た

だに、知らざるのみならず、かぶれる高さ帽子にちどろきたらむ、いと丁寧に、物などいふ。柳家、いとも、低き鼻うごめかして、横柄に、うけたたへするさま、いかにもをかしかりしかば、われわれは、思はずふき出しぬ。あはれ、こをかしかりしものといはずば、他にをかしかりしものは、なにかあらむ。さてまた、こゝに、をかしかりしことこそあれ。われわれ、須磨に滞在中、名所古跡など、見めぐりしに、光源氏の舊跡と、いふところあり。寺は、光源寺といひて、このわたりにては、大なる寺なり。寺僧にあひて、何くれと、質問せしに、光源氏の由來を、喋々と、のべたり。をかしさを堪へて、さゝをりしに、最後に、君たちは、學者にておはしますむ。この光源氏の舊跡を考證して、世の人々に、知らせてたべといふ。そは、東京なる例の博士にたのむ方、よからむといひしに、かの博士は、あるものをなすと、のたまふとかや。さる博士には、たのむべからずといふ。あるものをなすといふ博士なれば、なすものは、また、ありといふならむといひたるに、寺僧、頭ふりたて、すこし怒れるさま、かの物語なる、明石の入道そのまゝなりき。

こゝちよかりしもの

夜ふけて、明石の浦に、月見たる、曉はやく起き出でて、須磨の浦に、漕ぎ出づる舟を、ながめたる、いづれか、こゝちよからせらむ。嵐山にのぼりて、松ふく風をさき、鴨川におりたちて、さよき流を手にむすぶ。これらは、またことに。かの八坂にて、金的を射あてたるなど、つまらぬ事と、人はいへ、そのこゝちよさ、今もわすれず。京都より、大阪にゆかむとせし汽車中、下等の切符をもちて、中等室に乗りこめる洋人あり。役員に、見あらはされて、小言さしたる、いみじうこゝちよし。その洋人、うちつぶやきて、下等室にうつらむと、急に立ちて、出て行きしが、長押にて、頭を、またゝかにうちたる、また、一しほにこそ。

うれたかりしもの

洋人の妾宅のちほさ、これ、うれたきもの一。田舎紳士の跋扈、これ、うれたきもの二。神官の無學、これ、うれたきもの三。僧徒の無識、これ、うれたきもの四。神官の無學のことは、八幡山のところにいへり。僧徒の無識なるは、比叡山のところにいへり。神官は、たゞ、神社の番人なりといはむには、われわれ、なにをかいはいはむ。僧徒は、寺院の丐兒なりといはむには、われわれ、なにをかいはいはむ。

神官は、神を尊ばざるべからざるもの、その神官にして、神のなにたるを知らず。僧徒は、佛を敬はざるべからざるもの、その僧徒にして佛像を、美術品と思ひ居るもの、比々、皆、然り。われわれのうれたしと思ふ、また、理なきにはあらざらむ。嵯峨野に、三味線をきく、これ、うれたきもの五。東山に、煉瓦造を見る、これ、うれたきもの六。五と六とは、憂ふべきことなり、されど、その憂や、風流のために、憂ふるのみ。こゝに、あぐべきほどの、ことにもあらざるべきか。勤王家諸士の墳墓の、荒れゆく、これ、うれたきことの七。山陵を見おろすやうに、汽車の線路、布きたるところある、これ、うれたきことの八。大阪に滞在中、ある人の葬儀あり。わが旅館の前を過ぐ。下女、まばし見居たりしが、あの人の妻君さんの葬儀の方、餘程、立派なりきといふ。下女の言にはあれど、また、以て、人情の浮薄を證するに足らむ。試に、東京の葬儀を見よ。権門の家の、妻とか、子とかいふもの、死せし時の、葬儀を見よ。青山、天王寺など、常に、會葬者を以て、山をなすにあらずや。まかして、その御當人の、死せし時の葬儀を見よ。前にくらぶれば、半分、或は、三分が一なるにあらずや。前に、會葬者の多きは、

主人公に媚びて、その愛顧を蒙らむとならむ。後に、會葬者のすくなきは、會葬するも、後來、なにも目的なしといふにあらむ。あはれ、月に日に、人情の、浮薄に赴く、これ、うれたきもの、九。

ちどろさいりしもの。

大佛の大なる、佐保川の小さな、共に、ちどろくべし。奈良の宿屋の、蚊のおほき、姫路の宿屋の、蚤のおほき、晝も出てきて、人をさすよ。晝もあらはれ出て、躍りありくよ。京都大阪の、ハモのおほき、焼物も、刺身も、碗も、茶碗も、皿も、皆、ハモなり。これにちどろさいらぬ人はあるべしやは。京都人の、氣の長さ、大阪の車夫の、足のはやき、こはこれ、ちどろくべきもの、好一對。奈良縣にて、橿原神宮の建築のため、有志者の寄附金をあつめ居るよしは、かねて、さ、ちよびしところ。さるを、屬官某、その寄附金あまたをごまかして、遊蕩に消費せしよし、奈良にての噂。果して然らむには、こも、こゝにいるべきものならむかし。

にくかりしもの

僧徒の遊蕩、こは、目撃せしにあらず、新聞にて見たるなり。そも、一人二人ならむ

には、ともかくも、日々の新聞紙上、載せざること、まれなり。にくむべきかぎり
にこそ。茶代すくなしと、つぶやく宿の亭主、酒代やらすとして、悪口する車夫、に
くむべきはさらなり、その横面、はらまほしうて。春日神社の寶物拜覽せしに、義
家と義經との、美麗なる甲冑あり。義家の鎧の前皮、さりとられたりとなし。いか
なる奴か、その皮をはきたらむ。その奴、見出して、そのあつき面の皮、ひきむか
ば、いかに心ゆくわざならむよ。さてまた、悪むべきは、正倉院を見に來た、正倉
院を見に行くなど、無禮の言を吐くものあり。拜觀の二字は、口より出てこぬに
や。正倉院の拜觀は、高等官とか、學者とか、美術家とか、その資格に制限あり、
もとより、みだりなるもの、拜觀し得らるゝところにあらず。さはいへ、高等官
にも、さはめて、上等なる人物あれば、また、さはめて、下等なる人物あり。學者に
も、まことの學者あれば、また、あやしげなる學者あり。美術家とても、まかり。
かの、見に來た、見に行くなどいふものは、いづれの種類かは知らねど、實に、に
くしとも、にくき奴ならずや。さるにくき奴には、高等官なりとして、學者なりとして、
美術家なりとして、拜觀など、ゆるさずもあらなむ。かへすがへすも、面にくの奴ど

もつ。

月の家の歌

あらしの山のはつ櫻
高雄の山のむら紅葉
ながめながめて歸るさは
たれしもこゝにやどるらむ

鴨の河原の夕すゞみ
かつらの里の朝の雪
たづねたづねて歸るさは
たれしもこゝにやどるらむ

六〇六

春は軒ばにおぼろなる
秋はまがきにさやかなる
月影人をまちまてり
誰しもやどれこの宿に

六〇七

夏はすゞしき月の色
冬はこぼれる月の影
のきにまがきに人まてり
誰しもやどれこの宿に

西の京にやどるべき
宿てふ宿はおほかれど
かゝるまづけき宿はしも
こゝをおきてはなかるらむ

いざ旅人よふりはへて
一夜はこゝにきてやどれ
東の山のふもとなる
名もなつかしき月の家に

手向草の序

見もせぬ人は、さまで、戀しきものにあらずと、ちほかたの世の人はいふ。
されど、時ありて、いたく、戀しく思はるゝことなきにはあらず。げに、
故富本重任君は、見もせぬ人なるに、わが教子の如く、學弟の如く、あ
ひ見し人にもいやまさりて、戀しく思はるゝ。今、そのあ
もひを、歌によみて、この手むげの序に代へてむ。

あはれあはれ
うせにし人はうつせみの
この世のことを知るやいな
知らばなくさむすべあらむ
知らずばあはれいかにせむ」
あはれ君よ
きみをばかつて知らざれど
君がうせにしその後
きみがうたもてきたまひし
君の父君われ知れり」
あはれ君よ
きみにはつひにあはざれど
君まだうせぬその前に
きみの文もてとひきつる

君の友にはわれあへり
君よ君は
ふみをこのみてよまれきと
君の父君のたまひぬ
ことにつたなきわがふみを
めでつときくはまことにか
君よ君は
歌をこのみてよまれきと
君の友どちかたりけり
ことにつたなきわがうたを
ほめつときくはまことにか
あはれ君よ
君をばわれは知らねども
知りしにまさるをしへ子と

人はいひけりあとうと
われも今より思ひてむ
あはれ君よ
君のうつしゑわれもてり
こは父君のおくりもの
あはれ君よ
君のたまづさわれもてり
こはまた友のおくりもの
あはれあはれ
はしき教子君はしも
かゝる姿にありけるよ
はしき弟君はしも
かゝる文字をばかきてしよ
その目はさよくその口は

なめるが如きさまなれど
ものをいはねばなかなかに
これやあだなるものならむ
かきながしたる水ぐきの
あとによどみはあらねども
よどみがちなるころには
これもなみだのたねならむ
あはれあはれ
世になき人ををしへ子に
もつべきものにはあらざらむ
もたばわがごととはてもなき
思の淵にやまづみなむ
あはれあはれ
世になき人をあとうとに

なすべきものにはあらざらむ
なさばわがごとかぎりなき
なげきの野にやまよひなむ
あはれあなあはれ
かきかぞふればはや三とせ
君を『志のぶの露』うけて
そのはしがきをかきしより
つひにかわかずわがたもと
今はた『手向の草』わけて
もゆるほたるの夜もすがら
ひとりあもひに身をこがす
こゝろをきみはふるらむか
知らばなぐさむすべあらむ
知らざる時はさていかに

あはれあなあはれ
知らずばあはれいかにせむ
君よ
君の父きみはるばると
ふみをおこせてこの夏は
すゞしきかげにかたらはむ
われにあそびにこよといふ
ゆくといはむかゆきたらば
いとと思はまさりなむ
ゆかずといはむかゆかざらば
何時この思なぐさめむ
ゆくとさだめむ紀のくに
きみの墓ある紀の國に
あはれ重任の君

君のみ墓にわれゆきて
うたとふみとをなきながら
よみて手向けむそのをりも
はやちかづきぬまてまばし
さはいへあはれあなあはれ
昔の下なるその人は
わがよむうたにわが文に
きくらむものかあなあはれ

鬼物語序

この鬼物語は、予の友人の手にてなりしものにて、鬼といふおそろしきものを、かきあつめたる書なり。この文明世界に、鬼などあるべしとも、思はれざるに、そのおほきこと、實に、ちどろくに堪へたり。さては、この世にも、昔の如く、鬼も

の、ものゝけ、化物、幽霊、人魂、死神、暴神、邪神、悪神、悪鬼、姦鬼、神鬼、天狗、こだま、狐、狸、變化、一目、入道、鬼火などはあるなりけりと、そゝろに
おそろしくなりぬ。鬼は、和名鈔に、於爾とよめり。神代紀には、モノとよめり。
中ごろの書には、ものゝけといへり。いづれも、怪物をいへるなり。景行紀に、「山
有邪神、野有姦鬼」とあり。この物語によれば、常に、失意の鬼住めりとか。よく、
相似たりといふべし。古事記に、熊野山のあらぶる神の、大熊になりしことあり。
その熊、建御雷神の、天より、降り給へる横刀に、きりたふされたることあり。この
物語によれば、今の世の大熊は、壯士の爆裂弾にかゝれり。横刀と、爆裂弾の差こ
そあれ、こも、よく似たり。書紀に、「巧言以調暴神、振武以攘姦鬼」とあり。この
暴神、姦鬼は、この物語の所謂、赤鬼、黒鬼などなるべし。いかにとなれば、汝は、か
しこき鬼なり。金をやるべし、月給をとらすべし、御馳走を食はしむべしなどい
はるれば、直に、歸服する鬼なればなり。汝は、わろき鬼なり、江戸拂を命ずべし、
退去を命ずべし、發行停止を命ずべしなどいふるれば、直に、閉口する鬼なれば
なり。いづれも、小鬼と見えたり。源氏手習巻に、「鬼か、神か、さつねか、こだま

か」とあり。この物語によれば、今の鬼にも、種類あるよしかけり。いにしへより、
かゝる曖昧なる鬼どもありしならむ。同巻に、浮舟君の、鬼にとられしことあり。
その鬼、さよげなる男の姿になりて、かゝることをなしたるなり。この物語によれ
ば、今の世にも、淫奔無類の大鬼、小鬼、いとおほきよしかけり。注意すべきことに
こそ。三代實録に、「仁和三年八月十七日夜亥時、或人告行人云、武徳殿東縁松原
西有美婦人三人、向東步行、有男在松樹下、數尅之間音語不聞、驚恠見之、其
婦人手足折落在地、无其身首、右兵衛、右衛門陣宿侍者、聞此語、往見无有其身屍」
云々、時人以爲鬼物變形行此屠殺」となり。この物語によれば、ある大黒鬼の、あ
る少女の、おのれに従はざるを怒り、足もて、その横腹を蹴て云々せしことあり。家
の内外こそあれ、蹴られたる少女のためには、こも、一の鬼ならむ。大鏡に、忠平の
太政大臣貞信公の御事をいへるに、「かの殿、いづれの御時とはおぼえはべらす。お
もふに、延喜朱雀院の御ほどにこそは侍りけめ。宣旨うけ給はらせ給ひて、おこな
ひに、陣の座さまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど、通らせ給ふほど
に、ものゝけはひして、御太刀のいしづきをとらへたりければ、いとあやしくて、さ

ぐらせ給ふに、毛、むくむくとおひたる手の、爪は長く、刀の刃のやうなるに、鬼なりけりと、いとあそろしくおぼしけれど、おくしたるさま見えじと、念せさせ給ひて、おほやけの勅諭うけ給はりて、かために参る人捕ふるは、なにもものぞ、ゆるさずばあしかりなむとて、御太刀ひきぬきて、彼の手を捕へさせ給へりければ、まごひてもちたる手をはなちてこそ、うしとらの隅さまへまかりけれ。思ふに、夜の事なりけむかし」とあり。今のおとは、壯士とかいふものを、いたく、おぢおそれさせ給ひて、御馬車ちかく、人のよりくるあれば、それよと、覺悟せさせ給ふよし。鬼と見ゆるは、その人の心がならむ。たゞ、今のおとは、貞信公の如き勇氣ありや否や。又、大鏡をよみもてゆくに、ものけといふものありて、それにおそはれて、くらしみ給ひし大臣、いとおほかり。今の大員も、インフルエンザといふ、一のもの、けにかゝり給ひて、熱にうかされ給ひて、それ壯士よ、それ子爵よなど、たえず、うはごごとを、のたまふ方々ありとか。殊に、をかしきは、ある博士の如き、貴族院の壇上へのぼり給ひて、得意の辯をふるひ給はむとせしが、議員の顔が、高德や、重盛やなどの顔に見えて、皆、博士をうち呪むやうなりしかば、博士、おぢおそれて、遂

に、演壇を下られしよしなり。いかに、怪物おほき世なりとて、よも、さることはあらざるべし。こも、一のもの、けのまわざならむ。むかしは、ものけといひ、今は、神経病といへり。果して、ことなるものによ、いかゞあらむ。この物語には、青き鬼の、妻と共に舞踏する、陸奥の安達原の宗任とかいふ鬼の謀反する、大山とか、大江山とかいふところの痘痕鬼の、酒を飲むなど、いろいろの鬼どもあり。こも、いにしへの書どもまらべたらむには、必ず、さる鬼ども、あらむ。予は、淺學にて、その例を見出すこと能はざるなり。又、鬼の親睦會、鬼の議會などは、ことに、不可思議なり。されど、近ごろは、犬の親睦會さへありといへば、また、何ぞ、怪むに足らむ。今昔物語に、「近江國安義の橋は、鬼ありとさして、人の行き見て見たりしに、鬼、女になりてあり。云々」とあり。安義橋はまらず、この物語にも、新柳二橋のあたり、白鬼といふものありて、夜な夜な、貴顯紳士を、引きこむよしあるせり。共に、同じき變化（いんげん）のまわざならむ。あなちそろしや。これのみならず、同じきもの、相似たるもの、いとおほし。世の人、予の言をうたがはら、試に、この物語をよめ。必ずや、予の言の虚ならざるを、知るにいたらむ。さはいへ、昔の鬼と、今の鬼と、

大にことなり。昔の鬼は、夜のみ出たれど、今の鬼はまからず、百鬼盡行ともいふべく、青天白日、猶、横行するなり。昔の鬼は、やゝ、廉恥心ありしなれど、今の鬼には、さる心なきなるべし。そもそも、鬼の悪むべきものなるは、昔も今も、かはることなし。昔は、十二月に、追儼といふことありて、桃弓葦矢もて、鬼をはらひ、又、正月卯日に、桃枝をもて、卯杖を作りて、鬼をはらふことあり、この儀、久しくたえたり。予は、鬼物語をよみて、この儀の再興をのぞむ。明治二十四年一月十日、萩の家のあるじまるす。

車窓漫筆

余は、好みて、旅行するものなり。ことに、本年のごときは、都にありしは、むづかのみ。西に東に、又、北に南に、さまよひて、多くは、月日を、客中におくれり。その間、汽車に乗りしは、幾回なるべきか。その行程も、幾哩なるべきか。車中にて、新識の人を得たる、實に、六十二人の多さにのぼれるを見れば、われながら、驚か

ざるを得ざるなり。その六十二人の人々の中には、軍人もあれば、教育者もあり。學者もあれば、政治家もあり。宗教家もあれば、醫者もあり。商人もあれば、農業者もあり。新聞記者もあれば、小説家もあり。その人々の談話につき、おもしろしと思へるものを、そこはかとかきつけたるが、この車窓漫筆なり。

一、フロックコートを着て、西の市の熊手を、かつぎゆくをみたりと、一人がいへば、鼻をたらし居る百姓の娘の、稚兒鬘に結ひたるをみたりと、一人がいふ。階級も順序もなき、わがまゝ、勝手なる今の世には、めづらしきことにもあらぬにや。

一、船を山へのぼすといふ洒落は、京都の疏水知らざる、むかしのことなりと、いひし人のありしが、おもしろし。

一、エビスビールの嚙に、他のわろき麥酒をつめて、賣るものありと、一人がいへば、料理屋の亭主ともおぼしきもの、まことに然り。おのが家などには、麥酒のおき嚙を、毎月、おびたゞしく賣却するが、エビスビールとキリンビールとが、他の麥酒の嚙よりは、一錢ほど高く賣るゝなり。たゞし、ペーパーが、よごれては、だめなりといふ。麥酒を呑む人は、聞き置きても、損にはならぬ話ならむ。

一、紳士らしき人の、名刺をみれば、生命保険會社の社員なり。余は、始終、諸方をめぐりて、遊説し居るが、春季は、申込者、最もすくなくして、秋季は、最も多しといふ。秋になれば、誰も、無常を感ずるならむ。

一、僧あり。天龍寺、妙心寺に行きみれば、寂寞として、人ひとり、出入するものなきを、東西本願寺に、行きみれば、雑沓、いふばかりなし。佛骨奉迎の時、七條の停車場より、東山まで、道路にまきたる白布の價は、六千圓を超えたり。然るに、その佛骨の行列がすみたるあとにて、その白布が、六萬圓に賣れたり。ばからしきことならずやと語れり。この僧、禪僧と見えたり。

一、新體詩のはじまりは、福翁の世界國盡なりと、いひたる人あり。外山先生、聞かれむには、地下にて、なにと、のたまふならむ。

一、神奈川の生麥は、むかし、英人を殺し、ところなり。今、そのわたりをみれば、畑といふ畑は、ことごとく、甘藍(玉菜)をつくりてあり。かはればかはるものよとは、ある老人のものがたり。

一、近江の汽車中にて、人より、文字二を教へられたり。一は、琵琶湖にて、鯉鮒を

とらむとて、矢の形の如く、あらし籠をたておくが、その名は、はやく聞きたれど、その文字を知らざりしに、臥といふ和字が、それなりといふ。又、瀬多川あたりにて、ヒカイといふ魚、名物なるが、こも亦、その文字を知らざりしに、鱧とかくぢりといふ。この文字は、主上が、この魚を好ませ給ふよりして、ちかごろ、作りいだせるなりとぞ。

一、汽車通を以て、誇る人あり。その物語には、一々、敬服せり。その人、君は、烟管乗といふを知るかといふ。余は、知らずといひしに、こは、議員などの、よくする事なりといふ。そは、新橋など出づる時は、見送人などあるがために、上等の切符を買ひて、上等室に来るなり。まかるに、その切符は、横濱あたりまでの切符にして、横濱よりは、更に、下等の切符を買ひて、下等室に乗るなり。かくて、自分の郷里、即ち、西京とか、大坂とかに至れば、出迎人もある故、そのすこし前の停車場にて、また、上等の切符を買ひて、上等室にうつるなり。前後は、上等にて、中は、下等なり。そのさま、前後は金にして、中は竹なる、烟管の如くなれば、烟管乗といふなりといふ。世には、さもしろき乗方もあるものかな。

一、女子教育を以て、みづから、任ずる人あり。この人は、尾張の人と見えて、多く、その土地の例をひきて、ものがたれり。その人名古屋は、藝妓の産地にて、女子教育の如きは、容易に、行はるゝ所にあらずといふ。その理由はいかにといへば、女の子なれば、父兄は、ひたすら、その遊藝のみを奨励して、他を顧みざるが、すべてののならはしなり。名古屋にて、女子の標本になりたるものは、たれなるか。香雪軒といふ宿屋の娘なり。この娘、名を花子といふが、その名の如く、容色の美なるのみならず、遊藝にも長ぜしかば、遂に、某伯爵に見出されて、その夫人となれり。ある日、この花子、歸省せしが、出迎人、停車場にみちみちたり。人々、いはく、娘をもつならば、かゝる娘を、もたまほしきにあらずやと。娘どもいはく、われも女と生れたるからは、あの人の如く、ならまほしきにあらずやと。この一例にても、この地の、女子教育のむづかしきは、知られむと言ふ。余は、物をもいはて、たゞうちうなづきぬ。

一、樹木教育といふことを、まきりに、とく人あり。そは、忠臣義士の社、孝子節婦の墓などにある、草木を掘りきて、庭に植ゑ置き、そを子供等に、示して、知ら

ず識らずのうちに、忠孝節義の性情を、養はしむるなりとか。その話の序に、ささつとし、京都の御所を拜觀せし時、紫宸殿の前なる御庭に、橘の實の、落ちてありしを拾ひきて、庭にまきたるが、二本はえたりといひしに、是非、一もと賜へといふ。余、その志にめてて、やらむことを約せり。

一、系圖論者あり。徳川將軍にも、賣卜者の娘の胤あり。某華族にも、豆腐屋の娘の胤あり。下等社會は、勿論なれど、上等社會も、また、多くは、その系圖、よろしからず。系圖のよきは、中等社會、即ち士族なりといふ。話は、一轉して、結婚の事に及びしが、その人は、紳商などの娘と結婚することの、よからぬことをのべたり。かりに、學者が、紳商などの娘を、娶るとせむか、無教育なることは、まばらくおくとするも、^{やぶ}家風のちがひたるをいかにせむ。里にありし時は、端唄をうたひ、三味線をならし、寄席にかよひ、芝居にうかれ、交際する者は、役者にあらざれば、はなし家。机の引出には、いかなる寫真をいれ居りしか。櫛箱には、いかなる紋の簪を入れ居りしか。學者の家に嫁入りたる後、その家にあるほどは、つゝしみても居らるべけれど、所用ありて、里にかへらばさかに。その朋友は、皆、以前

うになりたらむには、國華、また、繁昌して、天狗、ヒーローの如く、大なる廣告札を、立つるに至らむといへば、それもさうなりといひて、笑ふ。

一、鑑定家めきたる人とも、乗り合ひたり。近來、古物古物といひはやす故に、偽物のおほくなれること、おびたゞしとは、その人のことばなり。鎌倉のある寺に、頼朝の髑髏を藏せり。僧に乞ひて、そを見たるに、その髑髏、甚だ、ちひさかりければ、怪みて、「歴史によると、頼朝の頭は、きはめて、大なりといふことなり。この髑髏の、かくちひさは、いかに」と問ひしに、これは、「頼朝氏、十二歳の時の髑髏なり」と答へたりとか。おなじところなる圓覺寺の東に、大なる鐘あり。世の常の人の力にては、撞くも、その聲を發せしむること能はず。僧、出て来て、朝比奈義秀、これをつきたりといふ。寺の創れるは、北條時宗の時にかゝれり。義秀より後なること、若干年なり。義秀、いかに力ありとも、未だ鑄ざる鐘を撞かれむや。この二つの話は、誰も知るところなれど、これよりも、更に、甚しき話ありとて、説きいだしたること、多かりしかど、あまり長くして、老るすにたへず。その人、最後に、須磨寺に、光源氏の御位牌もあり。五條には、夕顔の塚もあり。安房上總に

行けば、八犬傳の古蹟、いたる所にあり。この頃、聞けば、伊吹山の麓に、「かくとだに」といふ谷も、いで來たりといふ。この勢にては、敦盛の首をかきたる刀、政子が妹と夢にかへたる鏡、岩藤の草履、お初の文箱、定九郎の蛇目傘、與市兵衛の小田原提灯なども、早晚、あらはるゝならむといふ。すべて、滑稽なれど、味なきにしもあらず。

一、よく、風俗に注意する人あり。汽車より、下りゆく人あるごとに、その人々の服装、その人々の髪髪、その人々の言語、その人々の舉動、一々、評論して、のこす所なし。かくて、いつも、その評論の末には、風俗の華美になるは、人情の浮華になるを證するものなれば、つとめて、それを矯正したきものなりといへり。上野の商品陳列所にては、蒔繪をしたる駒下駄を見たり。京橋の店頭にては、緋珍にてこしらへたる足袋を見たりといふ。それがしは、健康なる齒をぬきて、金齒を入れたり。それがしは、外出する時、時計を、七個までかけゆきたりといふ。まさか、さることもなかるべしといひしに、決して、いつはりにあらぬよしをいふ。彼は、なほ、語をつぎて、「宿屋に行きて見たまへ、いつこの宿屋にても、先づ、その服装に注意し、拘

の朋友なり。その家庭は、以前の家庭なり。役者にもあひに行くべければ、落語家をも、よび入るべし。その間には、決して、よき事のみは、あらざるなり。ことを思はむには、たとひ、幾百萬の持参金をもてくとも、一考すべきことにあらずや。最も、その持参金を、その娘の損料とおもひて、娶る人あらば、この限にあらざるなとりいふ。この論、もとより、極端の論にして、取るに足らざるも、ある所は、またさる事がらも、たえてなしとは、いひがたからむ。

一、名所圖繪の繪のみとりて、屏風數雙を、こしらへたりといふ人あり。美術家とか、好古家とかいふ人ならむ。余が、先年、京都奈良などをめぐりし紀行中に京都は、古今集の中を旅行するが如く、奈良は、萬葉集の中を旅行するが如しと、かきたることありしが、この人、そを讀みたりとみえてまきりに、そを賞讃せり。古社寺保存會は、古社寺破損會なりといひしも、この人なり。京都は、お祭にばかり、狂奔するところなりといひしも、この人なり。桂川のところは、「これより江戸道」といふ石たてり。むかしの人は、いかに優長なりけむと、いひしも、この人なり。布引の瀧は、水道にひかれて、全くなくなれり。世の歌よみは、いかに残念に思ふならむと、いひ

しも、この人なり。案山子も、この頃は、不風流になれり。徳利に目鼻をかき、それに、帽子をかぶせ、それにゑるし半纏などさせてあり。その殺風景なる、歌にもよめねば、畫にもかゝれずなれり。世の進歩と共に、鳥なども、かしこくなりて、昔の案山子のごときものにては、驚かぬにやあらむといひしも、この人なり。いづこの宿屋の掛物も、皆、偽筆ばかりなり。されど、京都は、京都だけありて、探幽、應舉などの偽筆を、かけをるなり。東京にゆけば、山陽の偽筆をかけ、北海道にゆけば、一六の偽筆を、かけてありといひしも、この人なり。奈良に、二三年住めば、いかなる人にて、美術思想起るなり。極めて、俗物といはれし知事も、やめらるゝまでに、古き瓦の五六枚、古き佛像の二三體位は、もちかへるやうになるなりといひしも、この人なり。この人、巻烟草はのめど、天狗とヒーローとは、のまずといふ。その意、いかにといへば、天狗とヒーローとの廣告札、いづれも大に、それがため、諸方の景色を損ずることの、にくらしければなりといふ。君の烟草は、何の烟草なるかといへば、國華なりといふ。君たちも、わが如く、天狗とヒーローとはやめて、これのみたまへといふ。余、世間の人、皆、悉く、君の説に従ひて、國華をのみや

うになりたらむには、國華、また、繁昌して、天狗、ヒーローの如く、大なる廣告札を、立つるに至らむといへば、それもさうなりといひて、笑ふ。

一、鑑定家めきたる人とも、乗り合ひたり。近來、古物古物といひはやす故に、偽物のおほくなれること、おびたゞしとは、その人のことばなり。鎌倉のある寺に、頼朝の髑髏を藏せり。僧に乞ひて、そを見たるに、その髑髏、甚だ、ちひさかりければ、怪みて、「歴史によるに、頼朝の頭は、きはめて、大なりといふことなり。この髑髏の、かくちひさきは、いかに」と問ひしに、これは、「頼朝氏、十二歳の時の髑髏なり」と答へたりとか。おなじところなる圓覺寺の東に、大なる鐘あり。世の常の人の力にては、撞くも、その聲を發せしむること能はず。僧、出て來て、朝比奈義秀、これをつきたりといふ。寺の創れるは、北條時宗の時にかゝれり。義秀より後なること、若干年なり。義秀、いかに力ありとも、未だ鑄ざる鐘を撞かれじや。この二つの話は、誰も知るところなれど、これよりも、更に、甚しき話ありとて、説きだしたること、多かりしかど、あまり長くして、老るすにたへず。その人、最後に、須磨寺に、光源氏の御位牌もあり。五條には、夕顔の塚もあり。安房上總に

行けば、八犬傳の古蹟、いたる所にあり。この頃、聞けば、伊吹山の麓に、「かくとだに」といふ谷も、いで來たりといふ。この勢にては、敦盛の首をかきたる刀、政子が妹と夢にかへたる鏡、岩藤の草履、お初の文箱、定九郎の蛇目傘、與市兵衛の小田原提灯なども、早晚、あらはるゝならむといふ。すべて、滑稽なれど、味なきにしもあらず。

一、よく、風俗に注意する人あり。汽車より、下りゆく人あるごとに、その人々の服装、その人々の髪髪、その人々の言語、その人々の舉動、一々、評論して、のこす所なし。かくて、いつも、その評論の末には、風俗の華美になるは、人情の浮華になるを證するものなれば、つとめて、それを矯正したきものなりといへり。上野の商品陳列所にては、蒔繪をしたる駒下駄を見たり。京橋の店頭にては、繻珍にてこしらへたる足袋を見たりといふ。それがしは、健康なる齒をぬきて、金齒を入れたり。それがしは、外出する時、時計を、七個までかけゆきたりといふ。まさか、さることもなかるべしといひしに、決して、いつはりにあらぬよしをいふ。彼は、なほ、語をつぎて、「宿屋に行きて見たまへ、いづこの宿屋にても、先づ、その服装に注意し、拘

冠にても、高利貸にても、穢多にても、妓夫にても、服装だに美麗なれば、上等の座敷に通すにあらずや。また、諸官省にゆきて見給へ。身なり、美麗なれば、役人どもは、やたらに、御世辭をいひ、身なり、疎野なれば、給仕までが、輕蔑するにあらずや。ことに、葬儀などに臨まむには、いかに。葬儀をいとなむ人も、會葬する者も、殆ど、御祭をいとなむが如く、御祭を見物するが如し。葬儀につきて、思ひ出したる事あり。そは、ある貴顯の妻君の、死亡せる時は、會葬者の數、三千人にあまれりといふことなりしが、貴顯その人の、死亡せし時は、會葬者の數、百人にもみたりといふことなり。妻君の葬儀の時は、顔を出しおきて、その貴顯の恩顧に、あづからむとするなり。貴顯の葬儀の時は、會葬するも、何等の得なく、却つて、車代が損なりといふわけなり。その人情の浮薄なる、驚くべきにあらずや。この葬儀につきて、今一つ、思ひ出したることあり。そは、香奠料をあまたとりて、香奠がへしをせず。そを、盲啞院とか、孤兒院とかへ、寄附すること流行せり。外面をみれば、立派なるが如くなれど、内面を見れば、その寄附する金額は、香奠料の三分の一位にして、他の二分は、懐に入るゝなり。ことをかききは、ある人の如き、

香奠料を、ある學校の建築費中に寄附して、懸懸より、金盃をもらひたりとの事なり。諸君いかに思はるゝぞ」と、いさまたて語りしが、余は、風のこゝちにて、気分すぐれず、毛布かぶりて、ねむるともなしに、うち眠りしかば、その後の話をきゝもらせり。

一、神武天皇の御陵にまうでしに、その前なる地上に、袴のまゝひれ伏して、をろがみ居るものあり。今の世には、めづらしき人よと思ひしに、不思議にも、その人と、畝火の停車場より同車せり。慷慨家と見えて、種々の不平をもらしてやまず。「近來、御陵は、以前にくらぶれば、やゝ立派になりたれども、なほ、場末にゆけば、廢頽せる所あり。なげかはしきにあらずや。東山の勤王家の墓を見て來りしが、いづれも草生ひまげりて、見るかげもなし。生きのこりたる貴顯方は、金殿玉樓に、あたゝかき夢を食り居るに、さりととは、おそれ多きかぎりならずや。元弘建武の忠臣の墓は、いづれも官社に列せられて、朝廷の御尊崇をうけるが、承久の亂にたふれたる、忠臣の墓には、さる御沙汰のありしを聞かず。こは、明治昭代の御缺典にはあらずや。社格昇進、社格昇進とて、種々、運動をなして、縣社より、國幣社

になるもあれば、國幣社より、官幣社になるもあり。その中に、おそれ多き事なれど、いかゞはしう思はるゝもあり。かゝる事は、學者などに諮問ありて、みだりにせぬやうに、ありたきものならずや。墳墓とみれば、みだりに、發掘して、曲玉、管玉、金環、瓮、土埴の類をとり出して、めづらしがるもの多かり。天皇の御上は、申すもかしてし。皇子皇孫、皇后皇妃、はた、大臣公卿などにて、陵墓のわかぬもの、その數、幾百千なるを知らず。けふは、不明なる陵墓も、他日、いかなる考證の出で來て、いかなるたふとき、陵墓と、なるかも知れざるを、かく、みだりに發掘するは、いかゞあらむ。參考陵墓の名稱のもとに、十分保存せまほしきにあらずやなど、いふをきくに、すべて、その肺腑より出づる議論にして、その精神のほど、感ずべきものあり。彼は、鬚を結ひてあり。彼は、鐵扇をもちてあり。家には、西洋の種の交らぬ和犬を、五疋飼ひをるよしなり。彼は、詩をつくるよしにて、詩をみせたるが、いづれも、慷慨の詩のみなり。強盜、詐偽などにはいやなれど、國事犯などにて、禁錮せられ、鐵窓の下にて、一度、苦呻して見たきものなりといへり。おもしるき人物ゆゑ、別にのぞみて、その名を問ひたれど、いはずして、いへ行きぬ。

萩の家漫録

萩の家日課歌題

一日、國文學の社員某、訪ひきぬ。談、たまたま、歌のことにおよぶ。某、いつこより寄せる歌も、大概、古人の口まねにて、更に、おもしろからず。こは、題を出して、よましむるがためならむといふ。余、まことに、然り。されど、初學者の者に對しては、題を設けて、あらかじめ、その範圍を定むるも、また、必要ならむ。たゞ、古き題にては、類題の歌集をよみ、その意をとり、その詞をぬすみて、われといふことを、忘るゝおそれあり。故に、余は、題はいだせども、新しき題のみにて、古き題をいださず。その新しき題も、たゞ、その大體の目的を、示すのみにて、その精しき方面のことをば、勝手氣儘にえらばしむるなり。これまでの經驗によれば、そのかた、進歩のはやきのみならず、何れも、その肺腑より、かんがへおこして、

よむが故に、歌おのづから、活氣をよびて、優れたる詞も、出てくるなり。來年の
題も、はや、定めつ、これ見給へとて、見せしるに、こは、めづらし、いかで、わが
誌上に、載するをゆるさせ給へといふ。ここに、三百六十五題のうち、ところどころ
ろをぬき出でて、ちくりぬ。

銚櫃に、輪飾かゝれり。

羽子板抱きて、少女、ねぶれり。

事の上に、羽子飛ぶ。

芭蕉の霜よけを、とりさりぬ。

残れる雪に、雉子の足あとあり。

庭の芍薬、赤き芽をいだす。

春たちて、雪佛、かたくづれせり。

雪さえて、山のすがた、かはれり。

舟の上にて、女、芹を洗ふ。

梅のうつぼに、雪、まだ、残れり。

俎の上なる薺、雪を帯ぶ。

燒跡の柳、片枝、もえいでぬ。

とりてのあとに、落葉、萌ゆ。

梅さける門を、月に叩くものあり。

梅が枝を折りしに、をしき雷、こぼれぬ。

接ぎし桃、はじめて、花さく。

春雨のはるゝをまちて、菊の根わけせり。

梅散る乳母車に、小兒、ねぶれり。

麥畑の末に、城見ゆ。

通路の柳、むすぼれながらなびく。

菜の花の上に、同じ色の蝶とぶ。

野守のせまさ庭より、雲雀、たちあがれり。

摘菜のかへるさ、孝女の墓をとよ。

遣水の末、山吹をわけて流る。

赤き椿も、白き椿も、庭に落ちたり
鬼瓦に、燕、とまれり。

瓢の塵を拂ふ。

おぼろ夜に、扇ひろひたり。

水車の上に、櫻ちれり。

蟻、さくらの花をひきてゆく。

雨にちりたる花、養につきぬ。

落花、琴の上に舞ふ。

若鮎、流にさからひて、水の上に飛ぶ。

梨の花をいけて、枕草子をよむ。

蝶の羽風に、芥子の花、ちりぬ。

娘失ひたる母、雛に、新しき衣を着せたり。

牡丹、二ひら三ひら、かさなりてちりぬ。

丹躑躅のかげに、白き蛇、ぬぶれり。

手の、とくくべくもあらぬ崖に、藤の花さけり。

古寺の縁のあたり、羽蟻とぶ。

小兒、あすさくべき、朝顔の蕾を數ふ。

卯の花、露の葉の上に、こぼれたり。

畑のいちご、雨にぬれぬ。

合歡の朝風に、蝶、夢ながら、飛ぶ。

紅の花に、白き蝶とまれり。

ねぶらむとして、合歡の葉、うごく。

打水の雫、飛びて、朝顔の蕾をぬらす。

若葉のちくに、瀧の音す。

塔のささ、若葉の上に、見えたり。

蝙蝠、古社のあたりをとぶ。

乳母の家を訪ひきて、時鳥をさく。

雨の中に、田植歌をさく。

野川に、まづのを、馬を洗ふ。

橋落ちて、小僧、かへらず。

五月雨に、壁の色紙、半、はがれたり。

朝露の庭に、梅の實落つ。

蓮の葉がくれに、澤瀉、さけり。

さみだれに、池の河骨、見えずなりぬ。

祠のめぐりに、栗の花、みだれたり。

壁にたてる琴の緒、おのづから、されたり

洗手鉢の柄杓の上に、蝸牛、這ふ。

鯉躍りて、蓮の浮葉、うごく。

禿、欄干によりて、ねぶれり。

花菖蒲をもちて、渡舟に乘れり。

螢、蚊帳をまよふ。

兒の忌日に、螢を放つ。

奉納の手拭、すゞしき風に、うごく。

風によかれて、縁の手燭、影、定らず。

燈籠に、火をともし。

翁、陣羽織を曝す。

薬玉の紐に、小猫、たはぶれをり。

萍、わかれて、水馬、出てたり。

清水のもとに、山伏、笈をちろす。

瀧のまぶさに、百合の花、うごく。

床の間の石菖、なほ、夜露を帯ぶ。

水一すぢ、月に、くひな鳴く。

宵の釣瓶の、雫もあちあへぬに、夜はあけぬ。

蚊遣火のもとに、茶杓をけづる。

蝸牛、桐の葉と共に、落ちたり。

紫苑、たふれながら、花さく。

稻妻の光に、萩の露を見たり。
桔梗の花のひらく力に、露、こぼれたり。
薄原に、欄轅あり。
追分の薄の中に、石ぶみたり。
夜深くして、星、ひとつ飛ぶ。
寺の湯殿に、こぼろぎ、鳴く。
野川のきしに、蓼の花、咲けり。
川をへだて、砦の音す。
月の夜、ゆくべきところもなく、門をいてぬ。
月を浴びて、美人、縁の柱によれり。
夕月夜、亡友に似たる人に、ゆきあひぬ。
亡き友の寫影、や、うすくなりぬ。
山ざとの友、歌をへて、さめじをこせたり。
松風、夢に、落つ。

いづこやらむ、鼓の音す。
秋の夜、刀をうつ音す。
鳥居の前に、鹿、二疋をり。
峰の鹿、なきやみて、月、出てたり。
月のぼりて、砂の上に、二人の影、うつりぬ。
風にふかれつゝ、馬と馬子と、さむげに、ゆく。
雁なく夕、夫の遺髪、とどきぬ。
母衣かけて、車中に、雁の聲をさく。
地圖を手にして、雁をさく。
常夜燈、霧の中に、さえ残れり。
閑伽棚に、紅葉、折りちらしたり。
病める女、秋海棠を見てあり。
紅葉の葉に、歌かきて、妹が門に、すてしきつ。
鐘樓にのぼりて、くれゆく秋を惜む。

秋の夕日、さびげに、烏瓜を照す。
庭鳥、雛をいだきて、殘菊の垣根にをり。
水涸れて、水車、めぐらす。
霜の夜、車夫、から車をひきゆく。
鷹にけられて、白鷺、ひくく飛ぶ。
箬、寐覺の間の戸をうつ。
書の中より、紅葉の古葉、あらはれぬ。
時雨ふりきて、柵をぬらしぬ。
枯あしの中に、捨小舟あり。鷺ありぬ。
さむき朝、葱を洗ふ。
すてたる草鞋に、霜おけり。
箬、棕櫚の葉をうつ。
藪の上に、霜おさぬ。
六の葉のつもれる垣根に、寒菊、咲けり。

草枯れて、野をゆく狐、かけ、あらはなり。
風にうごく落葉の中に、みそさとし、おぼれり。
濱千鳥、波の泡をふむ。
吹雪の夜、薬とりに行く子あり。
櫛のあとをたどりて、雪の夜路をゆく。
山家に、みめよき女、榎火たきてあり。
ふとく夜、手負の猪に遇ふ。
水仙の鉢に、雪、すこしふりかゝれり。
鷗きて、庭の雪に、南天の實をこぼす。
雀、飛びて、小笹の雪をちらす。
雪の夕、峰の庵を訪ふ。
床なる冬牡丹、花ひらかむとして、ひらかず。
鼠、枕頭の薬瓶をたふす。
月寒き夜、佛をささむ。

焚掃の日、なき娘の雛、してきぬ。
くらき燈の下に、女、衣を縫ふ。
夜店にて、一ふりの古刀を買ふ。

琴のうららに

この小琴松風は、亡妹の秘藏せしものなり。この世にありしころは、こをきいて、
心なぐさめしこともありけるを、今は、なかなか、あたなるかたみとなりけり。
こをかきならさむには、その音は、なほ、むかしにかはらざらむ。たゞ、その人な
きをいかにせむ。あはれ。

藏書印

藤井高尚翁の藏書印に、「寶とも寶ともおもふる文ぞわがなき世とて志みにまかす
な」。また、伴信友の藏書印に、「このふみをかりて見む人あらむにはよみはて」とく
かへし給へや」とあるをはじめ、人々の印には、種々のものあり。或は、「子孫永保」、

或は、「此書棄衣食所取」、或は、「門外不許出一尺」、或は、「珍書難獲好書難購子孫保
之」などあるもあり。この人々よ、いかばかり、その藏書に、執をとめたらむ。さる
に、子孫、これを保つこと能はず。いつしか、ちりうせて、今は、わが書庫にあるも
のさへあり。思へば、あはれなりともいふべきか。松崎慊堂翁は、その藏書印に、
「此書嘗在松崎氏之家」とあるしたり。子孫の保ちえぬを、見ぬきたるその識見、却
て、さきの人々にまさりたりともいふべからむ。今や、人情浮薄、父うせて、三日
もたぬに、その子は、その書を賣りて顧みず。そも、學者の手に落ちむには、不
幸中の幸なれども、中には、ちりぢりにちりうせて、珍書も、好書も、その行方だ
に、わかざるものおほかり。

ある人は、「まこと、書を愛せむと思はゞ、生前に、その方法をめぐらせ。學者の子
孫は、大かた、おろかなるものよ」といへり。やゝ、極端なる説なれど、これらの藏
書印を見れば、余も、また、うちどうなづかるや。

歌人の書簡

（このは松崎の
ぬきこや
ルえらるやう）

伴林光平翁の、なみなみの歌よみならぬは、世の人の、皆、まるところ。今はた、なにをかいはむ。余は、翁の、その教子に答へられたる、自筆の書簡をもてり。その文に、

御文、今日とどきぬ。おのれが、異賊の往來まけるころ、「君が代はいはほととも動かねばくだけてかへれ沖つ白波」とよみし歌を見て、或人の、ねばは、ぬにといふ言に通ふ辭なれば、この歌の四の句にあはせて、事の情違へりといはれたりとか。ねばに二種あり。一は、ぬにに通ふ意、「天の川あさせら波たりつゝわたりはてねば夜ぞあけにける」とある、これなり。一は、ぬ故にといふ意、「うゑていにし秋田かるまで見えかねば今朝はつ雁の音にぞなきつる」とある、これなり。おのれが歌のねばは、このあとのかたなり。さおぼされよ。この事、或人にはさかせ給ふな。おのれが歌を、おのれが、とかう辨ふるは、理にそむけばなり。あなかしこ。

おのが短冊

六四六

六四七

古川豊彰といふ人、柳原の露店に、おのが書ける短冊を、見いだせり。いくばくと問ひしに、三錢なりと答ふ。そはやすきものよといひしに、さなり、歌なくて、短冊ばかりならむには、三十錢の價ある、へきをといへりとか。こは、豊彰みづからの話なり。この人、今は、故人となれり。

蚊をにくむ

華族それがしの君、「蚊をにくむ詞」といふ文もてきて、余に、添削を乞へり。讀みもてゆくに、蚊のにくにくしきかぎり、書きつくされて、また、殘すところもなし。ことに、結末に、「さはいへ、金殿玉樓のうちにすむ人は、この蟲のにくさも知らずやあらむ」といはれたる、諷刺の筆力、めでたしともめでたしや。余は、その文の後に、左の評語を加へたり。

余、嘗て、樂翁公の「關の秋風」をよみはべりき。その中に、「夏の夕、すいしさに端居して、笛の唱歌などいへば、はや、その聲をまるべに、とめ來りて、おのが名をよばふ聲、いとうるまし。蚊遣ふすぶれど、烟うすきほどは、猶、た

ち去らず。人も堪へかぬる頃、かれも、まばし、たちゆくを、その隙を得て、
帳うちたれつゝ、今夜は、やすきいまぬへかめりと思ふに、耳のあたりに聲して、
枕のあたり去らぬぞいとにきき。紙燭もて焼き殺してむと思へど、起き上るこ
とのわびしければ、人呼び出して、焼きつくせといへば、紙燭もちありくほど、
火影の、目にてりそひて、ねむさ、いとたへがたし。顔にとまりてさすを、は
やりうちらうてば、おほくもらしつ。腹ふくるばかり吸はせて、うては、血う
ち散りてけがらはし云々。この外、虱蚤などいふ蟲も、おなじにくさなるべけ
れども、身にあらねばはぶきぬ」とあり。君よ、君は、やむごとなき家に生れ
給ひて、かゝる文をかき給へる、そのなみなならぬ御心ばへのほど、いと、
うれしく思ひ侍れど、蚊のにくさなどは、樂翁公、はや、かき給へり。君よ、今
一きは、辛酸をなめ給ひて、樂翁公が、身に知らずとのたまへる、虱と蚤とを
にくむ詞を、かゝせ給ひては、いかに。

萬葉假名

森鷗外君の紹介状もて、鐵筆家某、たづねきぬ。その人の、彫りたるものを見しに、
巧なりしかば、余も、大小ふたつ頼みぬ。大なる方には、「萩家主直文」の六字、
小なる方には、「萩我花妻」の四字なり。彼は、小なる方の、萬葉假名なるを知らず、
「萩我花妻」と讀みて、おもしろき語なりといへり。あまり、おもしろくもあらぬに
や。

金色人種

山川浩君より、おこせ給へる書翰の中に、「東洋は、金色人種の東洋なり。銀色人種
をして、横行せしむべからず」とあり。銀色人種の前に、みづから、銅色人種とい
ひて、低頭平身、更に、顧みざるもの、この金色人種の名稱をきいて、なにとか思
ふらむ。

古人の詩

家弟菱松、支那を漫遊して、かへり來れり。種々、談話の末に、わが國人の、かの地

に遊ぶもの、いたるところにて、詩をこはるゝが、おのれ、作り得ざるがため、古人の詩を、そのまゝ、かきちらすものおほかり。現に、それがしは、星巖の詩をかき、くれがしは、山陽の詩をかきたるを見たり。いかに、外國なればとて、古人の詩を盗み書くなど、にくむべきにあらずやといへり。古今著聞集に、「蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲、この句は、橘直幹が秀句なるを、齊然上人、入唐の時、わが作なりと稱しけり。但し、雲千里を、霞千里とあらため、鳥一聲を、蟲一聲と直したるを、唐人さして、佳句なれど、雲千里、鳥一聲とあらばよからむとぞいひける」とあり。さては、いにしへにも、さる事ありしものと見えたり。さはいへ、齊然は、拙劣ながらも、文字をあらためし、直しもまたるは、まだしも、良心にはづるところありしならむ。星巖、山陽の詩を、一字もあらためず、一句もなほさず、わがものがほに、かきちらす今の人々よ、その罪、齊然にも、まされりとやいはむ。

書の師

川口雪蓬といふは、西郷南洲の書の師なり。この人、或人に向ひ、弟子の南洲の書

は、買ふものあれど、余の書は、買ふ者なしと、歎きたりとか。こは、友人の物語。

柳陰垂釣

余、性、甚だ、小兒を愛す。故に、余が文には、小兒にかゝれるものおほかり。忘れむとして、忘るゝこと能はざるものゝ、ひとつなり。ある時、余は、日記に、左の文を老るせり。

一の宮川といふは、一の宮の北の方を流るゝ水なり。おのれ、この夏は、暑を、そのほとりに避けたり。寒村のならひ、見るべきものもなければ、聞くべきものもなし。朝夕、たゞその川に出て、釣を垂るゝを、たのしみとせり。はじめの日は、鮒ひとつと、鱒ふたつとをえたり。そのえものゝ、いとすくなかりければ、宿の翁は、いたく笑へり。次の日も、また、行きしが、こたびは、鮒ひとつえたるのみ。また、翁のために笑はれたり。はや、釣はやめむとも思ひしかど、あまりのくちをしさに、また、明るる日も、出てゆきぬ。單衣一枚に、へこ帯をまめ、まゝをからげ、あみ笠をかぶり、片手に菴をさげ、片手に、竿

をもてるさま、われながら、あやしげなり。川のかなたの岸づたひに、村の
のどもの通ふ道あり。そのなかほどに、老いたる柳、ひともとまげれり。いと
涼しげなれば、今日も、その陰に、座を占めたり。今日は、あまた釣り得て、
かの翁をおどろかしてむと、まづ、鉤を投げ入れたるに、ほどなく、鮒かゝれ
り。また、投げ入れたるに、またかゝれるなど、僅に、二時間ばかりのうちに、
八尾まで釣りえたり。とかくするほどに、堤の上に、人の聲す。かへりみれば、
乳母とおぼしきものが、三四才ばかりなる、愛らしき小兒を、ともなへるなり。
小兒のすがた、乳母のことば、このあたりのものとも思はれず。まばし、堤の上
にたちて見てありしが、かの小兒は、乳母と共にありきて、わが菴のうちの
をさぬ。鮒よ鮒よといひて、そこをばなれざるは、ほしきなめり。乳母は、ま
きりに、かへらむとすむれど、さかず。乳母は、よその叔父君のなれば、あ
もひとまり給へといふに、さかざるのみならず、はては、泣き出しぬ。そのれ、
小兒にむかひ、わ子は、この鮒のほしきにあつて入れば、さなりとうなづく。さ
らば、あたふへしとて、柳の枝を折り、それに、この鮒八尾をつらぬきて、さく。

りしに、乳母は、あつく禮をのぶ。小兒も、いとよろこばしげに、この鮒を、
手にさげて、もと來しかたへと行きぬ。あはれ、翁を驚かしてむと、釣りたる鮒
は、かの愛らしき小兒に、悉く取られたり。今日も、また、歸り來て、翁の笑
を受くべけれど、今はた、いかにかせむ。

片屏風

町はちぼえねど、牛込のある古道具店に、古き小屏風あり。たちよりて見しに、義
門、蘆庵、春海、濱臣、景樹などの短冊をはれり。二枚屏風の、かたかたのみにて、
かたかたはなかりしかば、いかにせしかと問ひしに、昨日、客に賣りたりと答ふ。
買ひには、これも買ひ行くべきに、かたかたのみ買ひ行きたるなど、めづらしき
客も、あればあるものよと思ひて、その残れるかたかたを買ひてさぬ。七日ばかり
たちて、學弟服部躬治君、訪ひ來りしかば、ふと、その事を話し、に、氏は、手を
拍ちて、そは、牛込の古道具店にありしものならずやといふ。さなりといひしに、
そのかたかたは、僕こそ買ひつれといふ。余は、驚きて、何故、かたかたのみ買ひ

たるかといへば、錢なかりしがためなりといふ。それには、いかなるものが張りてあるかといへば、千蔭、躬弦、廣道、雅望、了阿などの手簡扇面なりとて、つぶさに語りぬ。余、君にむかひ、二枚合はすればこそ、用にもたて、かく、かたかたにてはいづかたにありても、やくなからむ。余が買ひたる方を、君にゆづらむといへば、いな、わがかたを、君にゆづらむといふ。さらばゆづり給へ、永く、余が心をなぐさめむといふに、氏は、歸り行きて、やがて、もてきぬ。あくる日、經師屋よびて、そをばらせ、こゝに、はじめて、全きものとなれり。この屏風、心あらば、いかに、その奇遇を感ずらむ。

洋人の和服

わが國に来て、帝國ホテルに宿れる、倫敦日英會の副長、余に、日本服きて、寫したる寫眞を贈れり。彼は、日本通を以て、みづから誇るもの。さるに、この寫眞を見れば、左にさすへき扇を、右にさせり。思へば、二三年間、洋行して、歸り來るもの、佛蘭西ふりとか、伊太利ふりとか、洋服に、帽子に、靴に、やかましくいへども、

かれより見なば、また、余が、この寫眞を見るが如きおもひあらむ。つゝしむべきことにこそ。

犬の兒

余は、應舉のかける、犬の兒の軸をもてり。一日、そを出して、床の間に掛けたるに、長女澄子、見て、いたく怪む。その故を問へば、犬の兒にしては、あまり、ふとり過ぎたりといふ。思へば、維新このかた、人は、洋犬のみ愛して、和犬を愛せず。またがひて、洋犬のみ、跋扈して、和犬は、全く、そのあとを絶つにいたれり。故に、犬の兒といへば、狐の如く、狼の如く瘦せたるもの、みなり。今、長女の、應舉の犬の兒を見て、怪みたるも、理なきにはあらざるべし。犬種は、かくてもよし、人種にして、かくならむには、いかゞあらむ。おそろしうこそ、おそろしうこそ。長女は、ことし七歳。

湘南村

一口、湘南紀勝といふ書を読む。築井記勝、津久井遊記、湘中日録の三文、および、その詩を載す。詩は、つたなけれど、文は、いづれもおもろし。その中に、町村制をまかれたるが爲、數村を合せて、湘南村といふ雅名の出たりとて、いたく、よろこべる條あり。そもそも、地名は、歴史に關するものにて、ちよぶかぎり、舊名を保存すべきものなるを、かの町村制の出でてより、種々、緣故もなき名のあらはれたるは、余等の、深く、歎くところなり。余に、亡叔二人あり。その一人は、國學者にて、直澄といひ、一人は、漢學者にて、桂巖といへり。直澄は、言語の保護といふ論說中に、文人墨客といふものゝ、地名を紛亂することを論じ、この富士山を、芙蓉といひ、墨田川を、墨水といひて、得々たるは、何事ぞやといへり。桂巖は、墨水三十景詩といふを、出したるのみならず、浦和にありしころ、作りたる詩をあつめて、麗和集といふを出せり。一人が歎くことを、一人が喜ぶなど、國學者と、漢學者とのその距離、實に、遠きにあらずや。かの津久井郡の如きは、ふるくより、津久井縣の名を存せるところにて、實に、國縣の遺稱たり。府縣をおさし時、郡にあらためたれど、今、猶、故老は、津久井縣といへり。國縣と府縣と、古

今、その制をことにすれど、その名の存するは、めづらしからずや。さるを、湘南の村名出たりとて、鬼の首をえたるが如きおもひをなすは、沙汰のかぎりといひはじ。

めづらしき書生

みちのくの人矢部生、訪ひきぬ。生、年二十三、慷慨氣節の士なり。蒲生君平の山陵志を読み、感奮よく能はず、諸國をめぐり、山陵といふ山陵を拜せむとて、出でてるなりといふ。余は、その志を愛し、細井柴山廣澤兄弟の、ものしたる書類、または、古陵に關する圖志など見せしに、彼、涙をちとしてよろこぶ。余、彼のまづしきを知りしかど、あたふべき金もあらざりしかば、その去る時、松下見林の前王廟陵記、津久井清彰の陵墓一隅抄、聖蹟圖志などを、とり出でておくりぬ。むかし、君平、小澤蘆庵のなさげにより、よく、山陵をさぐるを得たりとか。生の行くところに、蘆庵の如き人、今、ありや、なしや。

楠公の碑

余、學兄三好屠龍氏と共に、楠公の社に詣てしことあり。氏、朱舜水の文の文字は、たが書きたるものなるか、きゝたゞしたれど、知る人なしといへり。このごろ、その建碑の擔當者たりし、佐々介三郎のかきたる明細記を見しに、その書家は、岡村元春といふ人なるよし、あきらかに老るせり。屠龍氏、今は、世になき人となれり。告げまほしけれど、これを告ぐること能はず。余のうらみ、いかにぞや。余、伊勢の人なる、川口常文氏の家にて、あるふるき紀行を見たることあり。それによれば、水戸黄門の、楠公の碑を建てられざる前に、尼ヶ崎の城主（青山氏）の建てられたるものありしなり。その紀行を書きたる人は、連歌師とおぼえたれど、今は、人名も、書名も、わすれたり。常文氏も、今は、世になき人となれり。聞かまほしけれど、これを聞くこと能はず。余のうらみ、また、いかにぞや。

鐘聲

六五九

西の都のある寺に詣てしに、小法師の、ころもの袖を、うしろのかたに結びかけて、鐘つき居たるを見たり。それよりは、いつこの鐘きても、そのさまの、思ひいだされて、一まほ、あはれをおぼゆることとなりぬ。その後、東の都のある寺にて、老るし半纏とかいふものきたる下衆男の、脛もあらはなるが、撞き居たるを見たり。それよりは、また、いつこの鐘きても、そのさまの、思ひいだされて、さらに、あはれもおぼえずなりぬ。ひとしく、無常を告ぐる鐘の聲なり。されど、西の都の鐘のひびきならては、わが涙は、いつへもあらずてなり。

追分石

道案内の如き、公共の碑石は、文化以前のものおほく、その以後のは、きはめて、すくなし。こは、治世の現象にて、亂世には、なき事と見えたり。

巡禮

追分に、さくらの老木、一もとあり。その下に、石の地藏たてり。たんぼ、すみ

六五九

れなど、そのあたりを、めぐりて咲けり。長き日も、はや、くれむとす。年九つばかりなる巡禮あり。左のかたの道を、たどりてゆきしが、やがて、詠歌をうたふことゑ、かすみの底に、まこえたり。あはれ、かの子よ、こよひ、いづこにやどるとすらむ。

根岸の里

けふは、日曜日なり。根岸めぐりをせむとて、出て行きぬ。天王寺を過ぎて、かの里の西の方に出て、まづ、於堂居士をおどろかしぬ。あらず。次に、毛軒仙人をおどろかしぬ。これもあらず。次に、阿庵禪士をおどろかしぬ。これもあらず。次に、美齋山人をおどろかしぬ。これもあらず。次に、奈窓閑人をおどろかしぬ。これもあらず。於堂居士は、やゝ紳士的なり。震災義捐音樂會の切符にても賣りつけられて、それにや赴きしならむ。毛軒山人は、芝居好なり。歌舞伎座にゆきしならむ。否、山人は、今日まで、かの芝居を見ずして、ある人にあらず。さては、男女混淆の濟美館にゆきしならむ。阿庵禪士は、いづこならむ。瀧野川か。禪士は、さる風流人にあらず。地震のバノラマか。禪士は、さる俗人にもあらず。それか、あれか。それよ、

禪士は、薄痘痕あり。必定、兩國の痘痕會にもせしならむ。次に、美齋山人は、詩こそつくれ、その性、俗なれば、團子坂の菊人形見物ならむ。この鑑定は、十中の八九までは、あやまらざるべし。奈窓閑人は、非常に、汁粉好なり。今日も、大かた、岡野へにも行きたらむ。もし、たがはむには、御免を蒙るべし。苦樓逸民は、新聞社の社長なり。逸民の新聞には、日曜日なし。こは、たづねたる余のあやまり、また、是非もなし。於堂居士といひ、毛軒仙人といひ、阿庵禪士といひ、美齋山人といひ、奈窓閑人といひ、苦樓逸民といひ、その號の下なる、居士、仙人、禪士、山人、閑人、逸民などいふをさけば、いかにも、脱俗せし如くなれど、そは、皆、虚稱のみ。皆、これ世間普通の人間のみ。俗社會の如く、おなじく、日曜日をまつ人々なり。その日曜日をまちつけて、集會、芝居、物見などにもする徒なり。普通人間の如く、汁粉など食ひて、たのしむやからなり。普通人間の如く、業務に、勉勵するむれなり。余は、この種の人の、何のために、この人間社會に、生れきたるかを、疑はざるを得ざるなり。あはれ、根岸には、共に、風流を談すべき人なし。いふ、これよりかへらむと、思ふをりしもあれ、ふと、心にうかびしは、遠の家主

人なり。主人は、偏狹を以て、友人間に名あり。主人こそ、在宅ならぬ。主人こそ、歌にてもよみてあるならぬ。ひとおどろかし、おどろかしてむとて、たちよりぬ。これ、またあらず。あはれあはれ、主人までも、うき世にまよひ出てぬるか、うちつぶやきつゝ、まばし、あたりを見てありしに、庭に、菊、あまた、さきにほへり。筆と紙とをこひて、

よその秋に迷ふあるじを恨むらむ

おくつゆまげし庭のまらぎく

とかきつけて、さて歸途につきぬ。家にかへりきて、机上を見しに、遠の家主人の短冊あり。いといぶかしと、手にとりて見れば、

庭にさく菊を見すて、君もまた

うき世の秋にたちまじらむ

とまゐりしあり。さては、余の、主人をたづねたりし時は、主人も、余をたづねたりし時なり。そをそれと知らず、なめげなる歌を、のこしさにけるかなとて、急に、端書かきて、そのわびをいひやりたり。主人も、わが如く、家にかへりて、余の歌を

見、主人みづから、この歌の、非なるを知りたらしむ。たゞに、知りたるのみならず、また、おなじく、端書かきて、このわびを、いひおこすならむ。椀岸には、共に、風流を談ずべきものなしと、思ひなりしは、また、余のあやまりなりけり。かゝる風流なる、主人のありけるものを。

驕狗

菖蒲見のかへるさに、隅田川の岸なる、ある樓にて、晝食す。おのれは、樓下のせまきところに休らふ。二階三階などにも、客ありとみえて、絃歌の聲、をりをりさこゆ。飯出づ。おのれ食ひてあるに、庭前を過ぎゆく狗あり。毛黒く、肥えよとりて、そのさま例ならず。呼びて、魚の頭を投げ與へぬ。見もかへらず。下女、かの狗は、牛の肉ならては、食はずといふ。いづこの狗なるかといひしに、三階の客の、つれ給へるなりといふ。今や、世の中、いとくるしく、飢にさげぶもの、衝にみちわたれるを、獸の身として、牛の肉ならては、食はずとは、いかにぞや。さても、にくき狗なるかななど思へど、狗は、なにとも思はざらむ。おのれも、狗を、にく

は、なかなか、野蠻の志るしともいふべからむ。古き辭書には、いぬ、即ち、犬といふ動物は、たゞ一つのみなれど、余の辭書には、いぬ、即ち、間牒者といふ動物も加へたり。犬を殺すことを、業とするもの、出て來しより、いぬころしといふ名詞も、出て來れり。忌むべく、厭ふべき詞なれど、除くべきにもあらねば、そも加へたり。今や、道德、地にちり、人々、各、利のみ争ふさま、いぬの、食物を争ふにことならず。今より、五十年、百年の後、更に、辭書を編纂せむとするものは、必ずや、余が今日の感を、再びするならむ。ことに、本年は、いぬの年なり。更に、あやしき詞の出て來もやせむと、筆を投じて、歎息するをりしも、書齋の前にて、いぬどものかみあひはじまれり。その聲、猿々獺々、また、猿々獺々たり。

古土器

愚庵、余に、一つの土器を贈れり。高さ、三寸、徑、五寸、口、大きく、腹、ふくらかに、尻、すぼまれり。色、淡黒にして、やゝ、つやあるなど、蓋し、南蠻の、最も、古きものならむ。この器、花瓶か、はた、水瓶か、はた、茶壺か、はた、酒

壺か。愚庵に問へば、いづれに用ゐるも、よろしといふ。余、性、偏固、たえて、變通の才なし。愚庵の、この器を贈れるは、諷するところあるにや。志るして、自ら、しましむ。

水村

村あり、家、五軒。川あり、舟、一艘。橋あり、柳、三株。こはこれ、北條より、那古へ通ふみちにて、見たるところ。水村の風景、よく、そなはれり。たゞ、余に、歌のなかりしを、いかにはせむ。

某に與ふ

蘭の花の、いかにほへるをめてて、蘭をば、めづるかと思へば、そのめづる人、花のさかむとする書を、かきとりぬ。いかにと問へば、花さかせては、蘭のためあしといふ。萬の用にみてむとて、金をば、貯ふるかと思へば、その貯ふる人、金をつかふことをせず。いかにと問へば、つかひては、金は、つもりがたしといふ。書を讀む

人、書の如く、物のするかと見れば、書の如くは、物のせず。いかにと問へば、書の如くしては、世の中のとほりわろしといふ。蘭は、花をめづべきため、金は、つかふべきため、書は、書の如く、物のすべきためなるをや。君の心は、いかにかあらむ。

萩之家歌集

門松

ひとつもて君をいはしむひとつもて親をいはしむ
むふたもとある松

萩寺は萩のみおほし露の身のぶくつきどころ
ことさだめむ

磯山の小松をひきてよる波に手あらひをれば鶴
なきわたる

緋臙の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ
山櫻花

少女子がうしほあみにし遠淺に浮環のごとき月
うかびきぬ

たゞひとり式部の墓に手向して紫野くればきこ
す鳴くなり

六七〇

原町にめしひ二人が杖とめて秋のゆふべをなに
かたるらむ

六七二

さわさわとわが釣りあげし小鱧の白きあざとに
秋の風ふく

うき雲は冬野に消えてやま寺の釣鐘さむし木
枯の風

千鳥なく堤の風をさむしともわれは思はず思ふ
子ゆゑに

陸軍始の行幸ををろがみて、

わが袖にかよふもかして御車の過ぎゆくあとの
春のはつ風

高輪御殿にて、観月の御宴をひらかせ給

ひける時よみて奉りける。

いつもいつもさやけかるらむ久方の雲の上なる
秋の夜の月

吉野にて、

法の師には、きをかりて御陵の櫻のち葉われ
そはらはむ

床の間の妹が小琴もものづから聲たてつべき歌
はよみてむ

わが心告ぐべき人もあらざれば歌にかくれてこ
の世をはらむ

わが歌のつひのまらべやいかならむ問へどこた
へず峰の松風

わが歌をあはれとちもふ人ひとり見出でて後に
死なむと思ふ

明治三十年一月十一日、皇太后陛下、崩御

あらせ給ひぬ。十三日の朝、雪ふみわけて

参内せしが、その道すがら、よめりける歌

どもの中に、

世にまさば歌をもめさむ世にまさば御酒たまは

らむけさの白雪

たがために跡つけさせずみやつこは御庭の雪を

けさ守るらむ

かゝぐべき簾おろしてこの雪に少女がともはも

の思ふらむ

千代までと祈りまつりしかひなさを雪に折れた

る松にまゐるかな

よそふべき君しまさねばみそのふの松をも雪の
降り埋めけむ

歌めさむ君はまさぬをあもしろくみにはの雪の

なにつもるらむ

まばじだに忘れまつらむ墨染のをてふりかくせ

けふの白雪

ふたゝびもかへりきまさぬいでましのよみ路に

つもれけさの白雪

白雪の消えまし、君を思ひ出でて誰かはけさの

袖ぬれざらむ

ふり積る雪は下よりとけにけりけふの愁よいつ

消えぬらむ

二日三日家にこもりてなき友の石ぶみかきぬ花
のちるころ

散る花を惜むわが歌ふるしたる紙をもさそふ庭
の春風

さく花はあとなくちりてうぐひすの御陵さむく
春雨のふる

かへりきてぬぎし衣の袖よりも二ひら三ひら散
る櫻かな

六七六

やよ子ども東鑑にのせてある道はこのみち春の
わか草

六七七

國分寺のあとへ聞えし菜島にふるき瓦を見いで
つるかな

若菜摘む幽禪あかさ舞子らもたまたま見ゆる岡
崎の里

田端にて根岸の友にあひにけり蛙なくなる春の
夕暮

豫備軍の召集にあひて、
朝夕に手をばはなたぬ筆すて、劔とるべき秋は
きにけり

家に古刀あり。

とほつ祖のいさを思へば劔太刀刃のかけたるも
うれしかりけり

大和の春の旅に、

關伽の水くまむとすれば谷川に白くうつれり
ら藤の花

君が袖にふれてうごきし白菖蒲あす紫に咲きや
かはらむ

駒とめてかへりみすればほととぎす一聲なきぬ
妹が家のあたり

あかつきのねやの時雨のあはれはも戀せぬ人は
知らずやあるらむ

めぐりきて今朝まぐるゝは吾妹子の夢とひすて
しなごりなるらむ

つくづくし手にもちながらねたる子の夢は春野
になほあそぶらむ

櫻見に明日は父よと契りおきて子はいねたるを
雨ふりいでぬ

をさな子が乳にはなれて父に添ひ今宵ねたりと
日記にゑるさむ

泣きまどふ親の心も知らぬ見れば子はもたさ
む瀬津日の神

六八〇

筆草の根をばつかねて砂の上に歌かきて見つ磯
の夕ぐれ

六八一

君が船を磯べに立ちて見てあれば袴のすそに波
のよせさぬ

よる波の音おもしろき荒磯にたゞひとりゐても
の思ふかな

蠣殻をのせたる磯の板びさし鶴鶴啼きて日は暮
れむとす

鎌倉にて、

遠くちかくひびく五山の鐘の音も聞きわくばかり
り里なれにけり

大和の旅にて、

みさゝぎの松の雫にたちぬれしこの旅衣たゞみ
て行かむ

鶴沼にて、

磯づたひゆきてかへらむ江の島へ一里はちかし
まぼろ夜の月

大町桂月に

わが贈る麻のさごろもぬぎすてゝはや身にま
へ綾に錦に

僧愚庵に、

生死しじのさかひはなれし君なれどなほ千代ませと
祈らるゝかな

加茂川にて、橋本光秋君に、

別れかねやすらふ身をばよそにして流れもゆく
か加茂の川水

戊申の夜
はる

の近江の海夕霧ふかしかりがねの聞ゆるかたや堅
田なるらむ

藻潮やくけぶりにつゞく里もなし浦わの船よた
れかこぐらむ

岩によりひとりまどろむ手枕に波のよせきて月
いてにけり

船人も船よりいでて若水をけさは汲みけり室の
とまりに

ましろなる石よりなれるこの少女われしきさま
ば衣させましを

少女子が繭入れおきし手筈より蝶うつくしう二
ついできぬ

少女子は摘みてくださて捨てにけり薔薇の花に
は罪もあらなくに

たをりきてわれたむけいとなきひとの母にない
ひそ百合の花

たふれたる松をそのまゝ橋にして賤はかよへり
谷のあなたに

てをちひて谷間にくるふ怒猪の牙のひびきに散
る紅葉かな

あまりにも清しまづけしありたちて手をひたし
見む山の井の水

馬屋のうちに馬の物くふ音すらもかすかに聞ゆ
夜やふけぬらし

○ 椿咲く久能の御阪の七曲まがりてくれば雉子な
くなり

燒跡にかれがれ梅は咲きにけりふたゝびたてよ
芽茸ける家

ぬれながら縁にのぼれる庭鳥に音なき春の雨を
知るかな

ひくつきの石をなてつゝひとりごとひひて歸り
ぬ春の夕暮

磯松を今はなれたる荒鷺のゆくへに見ゆる蝦夷
の遠山

大前にならず小鈴の音聞きてやしろの風ひるも
出てきぬ

落栗におどろかさされて蟻のいかれるさまも
もしろきかな

こゝかしこ温泉ちちくる谷川のけぶり斜に夜は
あけにけり

六八八

師堀秀成翁の十年祭に、

この秋はなにを手向の花にせむゆふべの風に萩
は散りたり

六八九

ある人のがり、

をさな子の佛のたなに雛おきて桃の花をば君た
むくらむ

人の、愛子をうしなへるに、

忘れたる紙鸞をばとりに獨樂とりにかへりさま
さむものとも思ひし

森鷗外君の父君のみまかられしをりに、
色も香も森の若木にとどめあきてこゝろ静けく
散りしさくらか

井上毅先生の御墓にて、

うきことのあるたびごとに君まさばまさばとば
かり思ひけるかな

佐々木高美君の百日祭に、

麓路にまちてをよはせわれもまた越ゆべくなり
ぬ死出の山坂

ともかくもこの秋まではながらへて今ひとたび
は萩の花見む

萩が花ささしあしたも萩が花ちりしゆふべも君
をこそ思へ

わが宿の萩に露あく夕ぐれを訪へと思ひし友は
とひさぬ

萩の枝にむすびてきつるわが歌は露にやぬれし
君が見ぬまに

渡殿をかよふ更衣のきぬのすそに花とみだれて
春の雪散る

小式部の墓にまうててかへりゆく人もありけり
おぼる夜の月

山雀の籠かけなれし軒の下に麻の新草もえいて
にけり

庭に散る花にも音の聞ゆなりいかにまづけきゆ
ふべなるらむ

いざ子ども文車ふくろくるまひきこ今日もまたかの繪巻物と
きて聞かせじ

歌のふみ二卷三卷座に散りてあるじは見えす山
吹の花

蚊遣火に筆のさやをば焚きながら君とすとしき
月を見るかな

芭蕉葉にから歌かきて筆おけばゆふへすとしく
瓜ふき出てぬ

月清みひとり越えきて二人まで友に逢ひけり歌
の中山

秋風にふかれてたてる瘦馬に折りこし薊與へて
ゆかむ

駒とめて今宵の月にきく雁は妹があたりをすぎ
てきつらむ

山かげに摘みのこざれし綿の實の色寒げなり夕
ぐれの雨

六九四

夜車のすさまの風にねざめして初雪見たり白河
の關

六九五

やり水はたえていく日ぞ落葉をばおちばのたゝ
くおとばかりして

町中の火の見櫓に人ひとり火を見て立てり冬の
夜の月

わき出づる湯川のすゑもこほりけり夜風やささ
し鹽原の里

藤衣

明治二十九年十二月十一日午後十一時、
わが父みまかりぬ。その夜、枕べに侍りて、
ひと言はものをのたまへ寐もやらでわれさもら
へり御枕のへに
かゝげてもかひこそなけれ夜もすがら涙にくも
るともし火のかげ
太刀を手にとりて、
父君のかたへにありてこの太刀をわがぬぐひし
はきのふなりしを

香を薫らす。

なき人のためにと焚けるたきもの、けぶりもけ
さはむすぼほれつゝ、

摺澤静夫君は、仙臺の人なり。父の、みまか
りけるを聞きて、やがて、たづね來給へり。
父の、仙臺にありし時、あまたの學生を教
育せしが、その中に、名の、世にきこえたる
人、少からず。摺澤君も、また、その一人なり。
よすがら、かたみに、父のいさををかたり
いてなどして、

ちく露はひとつなりしをいろいろに萩の花さく
宮城野の原

その日の夕つかた、山寺の鐘、いと悲しう
聞えければ、

かくばかりかなしきものときのふまで聞かざり
つるを入相の鐘

父の寫眞をもとめむとて、函などかいさ
ぐるに、ゆくりなく、岩倉具視公の寫眞を、
見いてにたり。公の、いまそがらしほどは、
いみじう、わが父を愛し給ひしかば、その
うせ給ひし後も、父の、まのひまつること
一方ならず。かくて、月ごとに、海晏寺に、ま
うてなどするならひなりき。されば、こた
びのことを、公に告げまゐらせむとて、

ありしごとあはれはかけよわが父は君がみもと
へけふ出て立ちぬ

尾崎行雄君の父君、さきに、わが叔母の、み
まかれるを、父のと聞きあやまりて、とぶ
らひのふみおこせ給へり。おどろきて、そ
のあやまりなるよしをいひやりける。ほ
どなきに、かう、父のみまかりしかば、また、
ふみやるとて、

このたびはまことに父のうせにしをまたいつは
りと君や聞くらむ

墓にたむけたる、榊葉の霜の、消えゆくを
見て、

おく霜は露となりてものこりけり今朝たむけた
る柳葉の上に

久しう、かひおける鶯を、放ちやるとて、
はなちやる籠のうぐひすこの春は父のみ墓の花
に鳴かなむ

わがまれる人に、瀧川素介君といふあり。
この人の父君も、わが父と、おなじ日に、み
まかり給ひぬ。墓さへ、おなじ青山なりけ
れば、まうづるごとに、必ず、あひ遇ふ。一日、
ともに、そこなる茶店に憩ひしに、いかゞ
老たりけむ、わが外套をば、うち着給ひつ。
かばかりの事も、時にとりて、また、悲しき

七〇〇

こゝちを、さそひてなむ。

たがへしもことわりなれや藤衣なみださへこそ
おなじかりけれ

瀧川君、わが家をおとづれ給へり。くさぐ
さの物語に、夜もふけぬ。君の、かへり給は
むとするに、

いたづらに泣きて今宵もわかれけり君とわれと
は親なしにして

清水廣景君は、仙臺の人なり。父には、親し
きゆかりある人なるが、ふりはへて、上り
きて、葬のとも志給へり。二日三日ありて、
歸り給はむとするに、

七〇一

さらぬだにかわくともなき藤衣けふのわかれに
またぬらすかな

高見廣川君は、熊本の人なり。ちかごろ、出家して、佛門に入り給へり。父との交、ふかかりしが、一日、尋ねきて、「めぐりあはむ春をたのみしかひもなく雪と消えにし君をしぞ思ふ」といふ歌を、たむけ給ひぬ。かくて、世の常なきことなど、語らひ給ふに、悲しさのうち忘らるゝものならばわれもかづかむ墨染の袖

除夜に、人々あつまりて、歌よむ。おのれ、今年は、二人の親を失ひしかば、

二人まで親にわかれしうき年もかぎりと思へば
悲しかりけり

元日の朝、近き家々にて、若水を汲むにや
あらむ、車井の、車の音の聞えければ、いと
どしく、ありし世の志のびいでられて、
年老いし父のこの世にましまさばおきても汲ま
む今朝の若水

久米幹文翁は、わが父の、親しき友なり。父
よりさきに、みまかり給ひしが、四日の口、
そのみ墓にまうてて、

わが父も君があとおひ逝きにけりともにもこえ
よ死出の山道

六日の朝、はじめて、鶯の聲をきく。
まぢまぢてうれしと聞きしその春は夢なりけり
な鶯のこゑ

青戸波江君に、父の遺物なる、残月といふ
硯を贈るとて、

天がける人のかたみと見ませ君雲間にのこる夜
はの月かけ

十八日、曉はやく、墓まうてす。青山わたり、
雪いと白きに、われならては、跡つけたる
人もなし。

あはれとも人は見るらむ御墓へとわがあとつけ
し野べの白雪

その日の夕つかた、友、おほく、あつまりさ
たれり。とりどりに、題をわかちて、歌よむ。
おのれ、春雪といふ題をさぐりえたり。と
りもあへず、

消えはてしひとにもわれはよそへてむ志ばしは
残れ春のあわ雪

わが家居は、豊島の里なり。うしろの岡べ
に、たちいでて見るに、若菜など、みづみづ
しうもえいでたり。

この春も岡の若菜はもえにけり摘みてさゝげむ
父もまさぬに

をさな子に矢をひろはせて春の日を弓にくらせ
り花の下かけ

山寺の石のきざはしありくれば椿こぼれぬ右に
ひだりに

朝月夜かすむ野守が垣根みちかけふみゆけばき
ぎす啼くなり

玉すだれゆらぐともなき春風のゆくへを見せて
舞ふ蝴蝶かな

萩見にととはし、君が靴のあとはまだのこれる
を庭のかよひ路

おくところよろしきをえておきおけばみなおも
しろし庭の庭石

呼びにやりし友より呼びにおこせけり雨はいづ
こもさびしかるらむ

庭鳥も雛をいだきてとやのうちに寒さをわぶる
夕ぐれの雨

ねぐらへといそぐ鳥もなにとなくながめられけ
り秋のゆふぐれ

このゆふべわれたとひとり過ぎにけり鶉鳴くな
る深草の里

桐ふた葉庭に散りきぬ秋風を知りそめたるはい
づれなるらむ

病みふして床にある身は人よりもはやく知られ
つ秋のはつ風

従軍行

駒にのり曉はやくわがくれば折れたる太刀に霜
あきにけり

日清戦役のありしころ、
耳塚のありてふことをまつろはぬ唐のえみしに
聞かせてしがな

あなじころ、多賀の宮にて、
潮沫の凝りてなりにし唐國も瓊矛のみいづ今ぞ
さるらむ

年久しく、朝鮮にある弟のもとに、
歸れとはのたまはねども母君のをりをりものを
おぼすときあり

池邊義象君をおくる、歌どもの中に、
わたつみの神も守らせこの船にわが思ふ友ひと
りのりたり

陸實君の、清國漫遊にゆくを送る。
歸るまで死ぬなといひしその人もたけき身なら
ず神まもりませ

天王寺の傍をすぎける時、
名は花子苗字は風間年見ればまだ十七よあはれ
この墓

小田原にて、
よる波をこはしといひしをさな子も貝ひろふま
て浦なれにけり

房州にて、
霜やけのちひさき手して蜜柑むくわが子志のば
ゆ風のさむきに

二荒山にて、

岩清水むすびて立てばその底にやせしわが影老
いし松かげ
岩かげの躑躅折らむとあり立ちて鶴鶴の巢を見
いてつるかな
名も知らぬ鳥の叫びに足とめてふりさけ見れば
雲高うゆく

大和の旅しけるころ、

長谷寺はこれより右とあるしたる石をぬらして
ゆく時雨かな

春の日はまだまだたかし立ちよりて讀みてもゆ
かむ壺の石ぶみ

藪なかの一もと覆けふもまた鳩ぞなくなるきの
ふの枝に

城あと、聞きにし岡に古瓦ひろひてをればきこ
すなくなり

霜よけをのけたる庭の萩の枝にぬるくまさはる
春の初風

明治二十六年の末つかた第一高等學校
の生徒、鎌倉にて、發火演習を行ひける時、
從軍行といふ題にて、よみける歌の中に、
霜志ろきいくさのにはに月さえてひさく過ぎゆ
く雁のひとつら
汐とともにあたはひさけむ攻めくれば影だに見
えず稻村が崎
敵の射る矢よりもまげくこの夕雨こそそゝげや
ぐらの上に
楯の上にうちやすらひて簫ふけば月ものぼりぬ
山松のあたり

ものゝふのともしすてたる篝火のけぶりのこり
て夜はあけにけり
いかにせむ弓弦はたえぬ矢はつきぬ劔も折れぬ
馬もたふれぬ
楯のちもに折れてみだれてたつ征矢の鷹の羽白
く霜おきにけり
さゝげもつ錦のはたにかゝやきてきよくものぼ
る朝日子の影
駒にのりひともしくれば負ふ征矢の羽音さやぎ
て秋風ぞふく
たむけするぬさにまじりて白旗の神のみまへに
散る紅葉かな

紀元節の日、野若草といふことを、
七ゆきし少女がともを志のぶらむ高佐士の野の
春のわか草

桂月とよもに、小金井にもやしける時、
櫻花まばしは散るなゆく水にやせし二人の影う
つし見む

福島教育會にて、

みちのくは歌枕おほし歌よまぬ人なゆるしそ白
川の關

七一六

吾妹子にねやの妻戸をあけさせてねながらけさ
の雪を見るかな

病む母の枕べちかくさもらひて今夜も聞きつ曉
の鐘

賤が家のかどのはひりに櫛の實のひとつこぼれ
て冬はきにけり

猿曳の脊にねぶりゆく猿の子をおどろかしても
ふる霰かな

七一七

うちうてば石にもこゑはあるものをいつまでつ
らき心なるらむ

いかにもせむすべなしやわが戀ふる人はこの
世の人とし思へど

砂の上にわが思ふ人の名をかけば波のよせきて
かげもとどめず

わがこふる歌てふものゝ戀ならば瘦せしこの身
をあはれと思はむ

少女子が扇の風やよわかちしふたゝびたちてと
ぶ螢かな

ふるさとの野寺の池は田となりてそのひとがた
に蓮咲きにけり

いにしへもかゝるなげきのありしやと問ひても
見まし軒の橘

こゝろみに扇の上にてせて見むひとふさをれ
夕顔の花

こぞの春妹とか縮かねしわかれぢの一もと柳もえ出
てにけり

妹が家の籠の鴉カもわれを見て名を呼ぶまで
馴れにけるかな

立ちいでてかへり見すれば妹が家のかどの柳に
鶯の鳴く

水上に少女がとものかげみえて里の小川を根芹
ながるゝ

七二〇

岩代の國なるある人の賀に、寄山祝を、
千代までもささくいませと君をのみわれ志のぶ
山不忘の山

七二二

池邊義象君の、歸朝せし時、
この三とせやまとの國をさびしともわれは思ひ
きちもふ君ゆゑ

人のもとへ、
わが歌の見すべきものはあらねども松風清し笛
もちて訪へ

宮城野に君しかへらば秋ごとに歌もて萩のたよ
りきかせよ

病みながら旅ゆく君が菅笠に吹かずもあれな秋
の夕風

時雨ふる旅のやどりのつれづれに歌まるし見ぬ
菅笠の上

雨にぬれて石部の里にやどりしは三年のあとよ
あはれ菅笠

こゝろみに蚊帳をばつらてねたる夜の枕に聞き
つ初雁のこゑ

なき友の柩まもりてさりざりす聞きにし秋はま
ためぐりきぬ

軒にきて呼へばまぐるゝ山鳩の聲もさむげに秋
ふけにけり

鈴蟲の聲するかたに船とめておもはぬ岸の萩を
見しかな

露ふかき野路の石ぶみよみをれば虫なきいでて
日はかたぶきぬ

故郷の妻子志のぶとねもやらで雨聞きをれば雁
なきわたる

はしき子のたむけ草にと庭に立ち萩の花をる秋
の夕暮

秋風に柳ちりくるこのゆふづくづく戀をやめ
むと思ひぬ

かたかたの袖をかたみにぬらしけり狭きから傘
相傘にして

池水をすゞしき風やわたるらし浮藻はなれて螢
とぶなり

うつぶきて何をかともに思ふらむ二もとたてる
姫百合の花

夢に見し女神のあとをまたひきてけさわれ見た
り白百合の花

わが宿は田端の里にほどちかし摘みにもまませ
鈴菜すとしろ

この里はねながら富士も見えにけり死なばこゝ
にて死なむと思ふ

入相の鐘のきこゆる山寺をとひても見ばやたゞ
ひとりして

谷水のめぐるいはほにやすらひて高峯の雲をな
がめつるかな

大洗にて、

大荒磯われちりたてば裾のあたりよせてくださ
る八重の白波

報効義會員山本敏氏、擇捉にて、病死せり。
氏は、水戸の人。

うつしうゑし人をまのびて島がくれいかにつゆ
けく花のさくらむ

彰義隊の墓にて、

たきもの、けぶりもたえて塚の上に春雨さむく
散る櫻かな

つたもみぢ色にいてもかゝりけり荒れたる寺
のあか棚の上に

きのふまで萩に薄にちとづれしものとも見え
木枯の風

まばしとて腰かけたるもえにしなり歌えるし
かむ野の一つ石

海とほく月はのぼりて岩の上に君とわれとの影
はうつりぬ

七二八

青柳のまづくよりちる白露をふたゝび蓮の上に
見るかな

七二九

あたらしく藁屋も見えてところどころ麥の花さ
く那須の篠原

父君の杖にやさらむ一もとをわれにはゆるせ庭
の若竹

神路山ふもとの里に家居してこの夏も聞く山ほ
とゝぎす

小本曾山高きこずるの鷺の巢もあやふきばかり
ふく嵐かな

うまや路の夜はの嵐のはげしさをいつかみやこ
の人に語らむ

家づともてきて植ゑしひともとの萩にもみゆ
る秋の夕風

母の脊にむかしながめしわれぞとはまざるやまら
ずや故郷の月

羽子板も羽根もてまりも枕べにもちきて今宵子
はねたりけり

うせし子にあもかけ似たる雛もあり買ひてや行
かむ妹に見すべく

賤が家の軒のたるひのひとまづくもつる音さへ
春めきにけり

まめこそはひきはへたれど山里はあつからな
るかどの門松

明治三十三年、病中の作のうち、

父君よけさはいかにと手をつきてとふ子を見れば
死なれざりけり
床にありて物思ひをれば小籠のうちにまたもち
りきぬ花のいくひら
世をまかる歌思ふまでなりにけりおのが命もか
ぎりなるらむ
このまゝに長くねぶらば墓の上にならずうゑ
よ萩のひとむら
月ふけて土におちたる梅が枝の影より細くわが
身瘦せたり

七三二

久保猪之吉の、獨逸へ行くわかれに、

病みつゝも三とせはまたむ歸りきてわが死なむ
とき脈とらせ君

七三三

おもふことありける頃、

身ひとつは山に入りてもありぬべし君をいかに
せむ親をいかにせむ

病おもくなりて、

木枯よなれがゆくへの静けさのおもかけゆめみ
いざこの夜ねむ

萩之家遺稿

終

先師の、この世にのこせる詩文、輯めて、こゝに、萩之家遺稿と名づく。

先師の書篋を探りて、萩の家漫録と題せる、二十冊の草稿を得たり。朱筆縦横、人をして、そゞろに、その苦心のあとをまのばしむ。この集は、すべて、その冊子によりて、校訂したるものなり。

『あすはいつこ』等の紀行文は、池邊義象氏との合作なり。されど、文の連絡の上より、一々、これを分つこと能はざれば、そのままに、その全篇を收めたり。

この集の編纂につきては、國語傳習所、日本新聞社、民友社、博文館、國光社、文寶堂等の諸社より、文稿再録の許諾を得、また、その出版につきては、一に、明治書院の盡瘁に依れり。こゝに、その好意を謝す。

標題の文字は、特に、佐々木高行伯の筆を、煩はせるものなり。

明治三十七年四月

萩の家門生

萩の家著書目録

日本大文典	全壹冊	明治書院發行
大鏡詳解	全壹冊	
訂正中等國語讀本	全拾壹冊	
中等國語讀本	全拾冊	
中等國文讀本	全拾冊	
國文學史教科書	全壹冊	
新編假名遣	全壹冊	
高嶺の雪	全壹冊	
萩の家遺稿	全壹冊	

日本文學全書 全廿四編 博文館發行

家庭教育歴史讀本 全四冊

新撰日本外史 全壹冊

新撰歌典 全壹冊

國文評釋 全壹冊

中等教育日本文典 全壹冊

中等教育國文軌範 全壹冊

日本大辭典ことばの泉 全壹冊 大倉書店發行

國書辭典 全壹冊

女子消息雁のゆきかひ 全貳冊

女子雅文教範 全貳冊

明治三十七年五月一日
明治三十七年五月三日
明治三十七年五月十日
明治三十七年五月十五日
明治三十八年六月十四日

(定價金壹圓貳拾錢)

故落合直文相續者
發行者

落合直幸

東京市小石川地區
原町百二十番地

印刷者

三樹一平

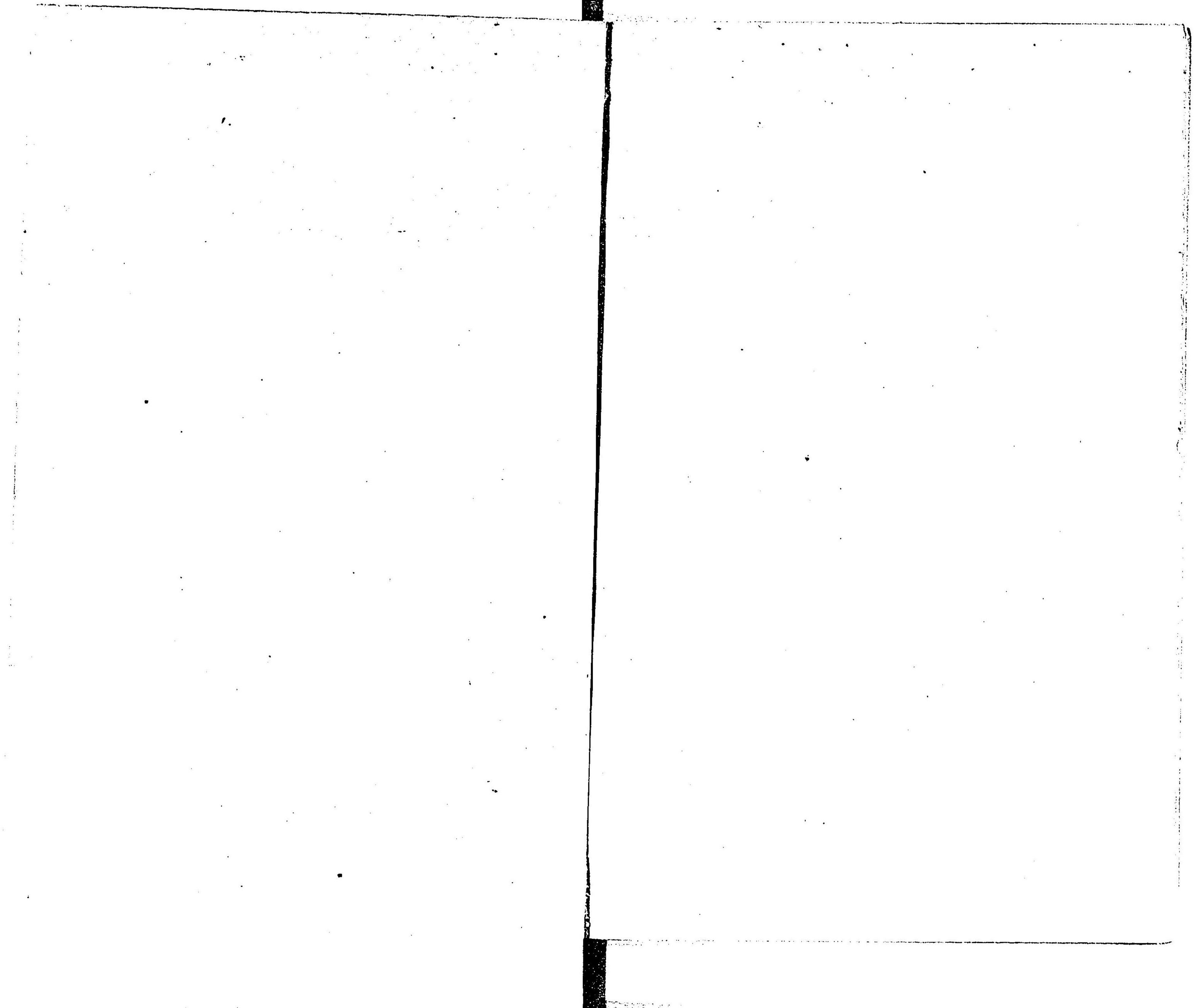
東京市神田區錦町
一丁目十番地

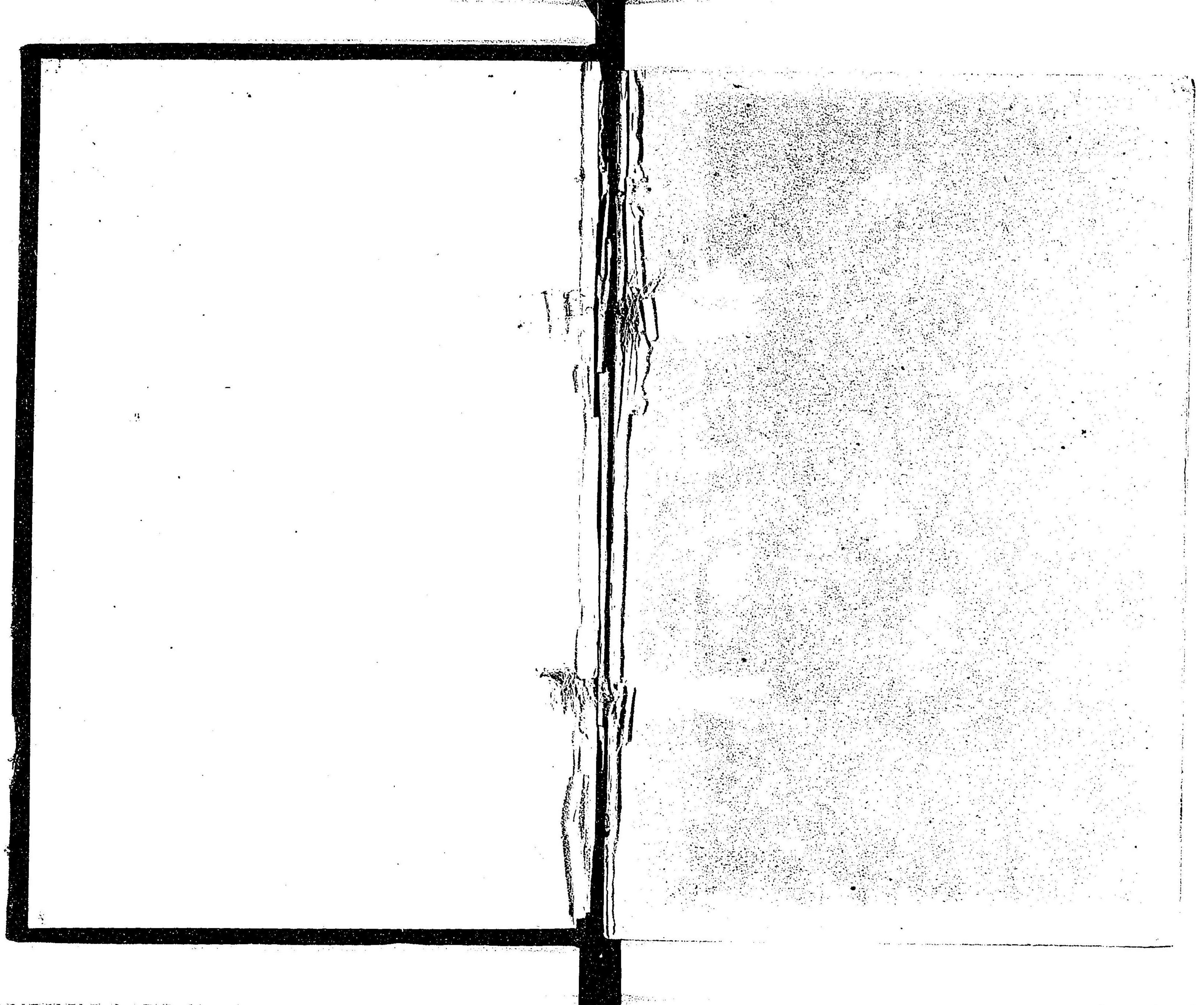
發賣所

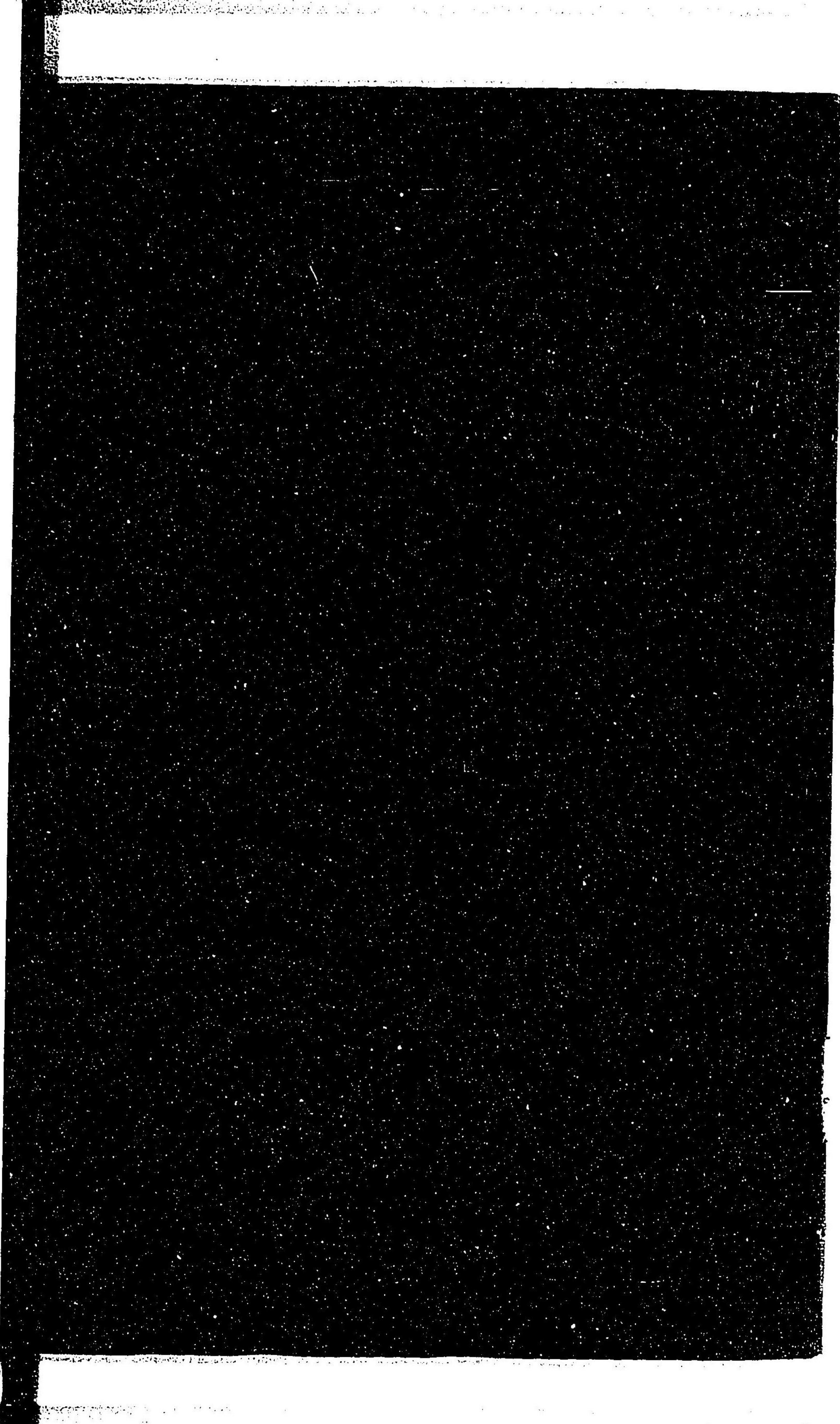
東京市神田區錦町
一丁目十番地

明治書院

特設部本局二四三八番







096217-000-7

914.6-O888h

萩之家遺稿

落合 直文/著

M38

DBR-0495



